

妙好人という生き方

A Lifestyle of a *Myōkōnin*

角 岡 賢 一

KADOOKA Ken-Ichi

ABSTRACT:

In this paper, the focus will be put on the lifestyle of the pious believers of the Jodo-shinshu sect. They are lay people, not monks, and were called *Myōkōnin*, literally 'the blessed.' Interestingly, only the faithful believers of this sect have been distinguished as *Myōkōnin*, never for those of the other sects. The *Myōkōnins* followed the Jodo-Shinshu doctrine listening to the preachings, and some of them left enormous writings such as anthems, poems, and *tankas*. Since the first biographies of them was compiled in the 1750s, studies of *Myōkōnin* themselves have been established as one branch of the Buddhism.

KEYWORDS

浄土真宗 (Joudo-shinshu Sect)、他力門 (salvation by faith alone)、
妙好人 (*Myōkōnin*, the blessed)、かしこだて (pretend-to-know)

第一節 はじめに

この小論は、真宗に特有と言われる妙好人について論じる。そもそも本稿の題とした「妙好人という生き方」からして矛盾絡みである。というのは、妙好人というのは周囲が評価した結果であって、その人自身が意識する生き方ではないからである。自力門を否定し、只管聴聞によって念仏の道に専念するように説くのが真宗らしい教えである。そして門徒が聞法するのは説教であり、これも真宗に特有である節談という説法が伝わっている。節談については拙稿(2020)で触れたが、妙好人の暮らしには説教が日々の糧となった様子を具に窺うことができる。また、物質的に豊かになって娯楽が暮らしに溢れている現代にあっては、信心が疎かになってしまうのは必然であろう。このような時代にあっては最早、新に妙好人が出現するような可能性は考えられそうにない。

また本稿の題名は、直林不退師『構築された仏教思想』第五章「生き方としての妙好人」に大きく触発されている。妙好人という存在は周囲の評価であって、本人が「妙好人として生きよう、妙好人と認められたい」というように発想するものではない。俗事に野心を抱かず、心の赴くままに信心に精進する姿を捉えて自ずと評判が高まっていったのであろう。そうして、その言行録が妙好人伝という一つの分野として確立されてきたものであろう。本稿では、妙好人そのものと併せて、妙好人伝という分野も体系化して捉えてみたい。

さて関山師（1992、2001）や釈師（2010）で指摘されているように、浄瑠璃・講談・浪花節・落語というような語り芸全般は、説教に源を発している。つまり、仏教は芸能の母胎であった。これは仏教に限らず、世界の宗教において共通であろう。例えば西洋においては、絵画や建築、音楽など全て宗教から発達したものであることは自明の理である。この小論では、この主張に基づいて信仰と芸能の接点を探ってみる。関山師（1992:28）は「前近代のわが国では、宗教・生活・娯楽（芸能）は一体であったので、説教（談義）には常に娯楽性が含まれていた」（傍点は引用者）と看破しておられる。

関山師『庶民芸能と仏教』第二章「説教の普及」において、仏教から庶民芸能へ展開していく道筋が系統立てて描かれている。そこでの説明によると安居院流と三井寺流が並び立っていた説教主流派のうち、三井寺派は芸能の元締めというような役回りに転じて説経浄瑠璃から説経節へと繋がっていった。この二つ以外にも「平曲・祭文・ちょんがれ・落とし噺・講釈・阿呆陀羅経などは、すべて説教の系譜と密接不離の関係をもっている」（同書 54 頁）と言われている。

浄土真宗を始めとする仏教諸派の説教が庶民芸能に推移する経緯について、関山師の前掲書において的確な説明が施されている。長くなるが、そのまま引用する。

宗教は理屈ではなく感覚的な要素の方が重要である。学問や知識だけでは信心は得られない。その大切なことを昔の布教家は、よく心得ていた。散文的、写實的、理論的な説教よりも「情念の説教」の方が、より多く享受されたのは、情緒に生きる人間の歴史から見て至極当然のことであった。その昔、高座に登った説教師は、ことばに節をつけ、見事な声と巧妙な話し方で、歌うがごとく、語るがごとく、笑いあり、涙あり、滔々と弁じたてて、まるで善男善女を吸い込むようであった。浄瑠璃のようでもあり、講談のようでもあり、節がつくと浪花節を思わせ、笑わせれば落語であり、泣かせれば人情噺でもあった。つまり、日本の「語る芸」「話す芸」のあらゆる要素を包含した節談説教独特のあざやかな弁舌が、満堂の群衆を陶醉させたのである。

ここで述べられているのは、妙好人という生き方に合致する。即ち、信仰が生活そのものであり、信心の中に心からの喜びが存在していた。信心する心を素直に喜び、常に感謝の念を抱きながら日々を過ごした。それこそが妙好人であり、周囲の人は畏敬の念と共に接した。嘗ての信仰心を失った現代から振り返ってみれば、古き良き時代であったと言えよう。時代は、芸能と信心が分離される以前であり、妙好人という在り方は日常生活の中で全てが渾然一体となっていたのである。

第二節 妙好人列伝

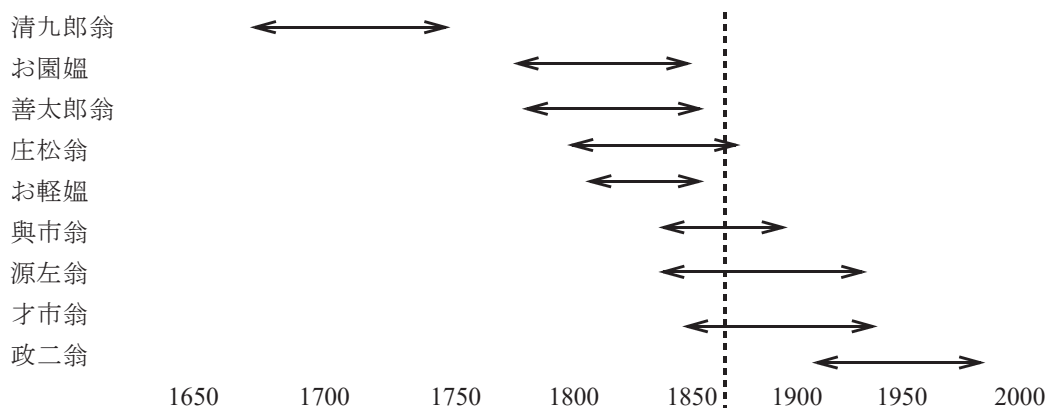
真宗特有と思われる信心のあり方として妙好人について一書となった例は多い。伊藤智誠師『妙好人めぐりの旅』、菊藤明道師『鈴木大拙の妙好人研究』、白川晴顕師『妙好人のこぼれ』、鈴木大拙居士『妙好人』、直林不退師『妙好人 日暮しの中にほとぼる真実』、西山郷史師『妙好人 千代尼』と、真宗関連出版物においても質量共に一つの中心を成すと言えるほどの分野であると言える。

直林師の『妙好人』という著は、副題を「日暮しの中にほとぼしる真実」とし、真宗固有の信心を紹介している。この分野では最も新しい刊行であり、ここを手がかりとして妙好人について知るには最適と思われる。まずは冒頭で「妙好人とは、苦悩に満ちた日暮の中で煩悩に染まらぬ信心の花を咲かせた、市井の浄土真宗念仏の行者」と紹介している。妙好人の定義というよりは、直林師が妙好人をどのように捉えているかという見方であろう。同書で紹介されている妙好人は、次の十人である。

- | | |
|------------------------|---------------------|
| (1) 赤尾の道宗翁 (生年不詳～1516) | 大和の清九郎翁 (1680～1750) |
| 三河のお園媼 (1777～1853) | 石見の善太郎翁 (1782～1856) |
| 讃岐の庄松翁 (1799～1871) | 長門のお軽媼 (1801～1856) |
| 棕田与一翁 (1841～1893) | 因幡の源左翁 (1842～1930) |
| 浅原才市翁 (1850～1932) | 斎藤政二翁 (1919～1984) |

男女別では、男性八人に対して女性二人という比率である。ここで仮に「翁、媼」というように敬称を附しておいたが、一般的に妙好人として「真価を発揮する」とようになるのは老境に入ってからと考えるのが自然であろうという前提に基づくだけに過ぎない。同書ではこの十人について、簡単にその生涯を辿っている。生年が不詳である道宗翁を除けば、九人の卒年を均してみると六八歳余りである。現代のような長寿化を迎える数十年前まで「人生五十年」と言われていた事を思えば、信仰について思索を深めるにはそれ相応の時間を要するというような事情が窺えそうである。

ここで理解のために、生存年代を図示してみよう。時代が離れている道宗翁を除く九人は、このようになっている。



こうして眺めてみると、時代の重なり具合が手に取るように見えてくる。明治維新の年に縦線を引いてみた。清九郎翁と政二翁を除く七人は、幕末にかけての江戸時代後期を生き抜いた。與市翁と源左翁と才市翁はご一新後の時期が長い。政二翁のみ、大正年間生まれで突出して遅い年代である。しかし考えてみるに、妙好人というのは時代の波を乗り越えて堅い信心を生涯に及んで保ち続けた同行であるから、万古不易の価値観を体したという観点が成り立つであろう。

う。上表の直前まで、下剋上の戦国時代が百五十年も続いていたのであり、江戸時代になってやっと世の中は落ち着いていた。この時期は寺請制度などによって仏教が体制安定に利用せられたという側面もあるが、戦乱がない太平の世で落ち着いて精進することも出来たのであろう。しかし幕藩体制に終わりを告げる明治維新と、軍国主義日本によって周辺諸国を蹂躪し、日本も敗戦によって歴史上最大の混乱に見舞われたのである。妙好人が、そのような大きな波に揉まれる中で何が出来たのか出来なかったのかを振り返ってみることも必要と思われる。そのような観点からは、政二翁から後も妙好人という生き方が今にまで伝わって然るべきなのであるが、現実にはそうっていない。この点については改めて、最終節で言及する。

大拙居士『日本的靈性』第四章でも妙好人について論じているが、採り上げているのは上掲(1)にも含まれている赤尾の道宗翁と浅原才市翁の二人だけである。その名も『妙好人』と題された大拙居士の一書は、驚くべき事に大半を才市翁の叙述に割いている。大拙居士は、才市翁が門徒として暮らし、大量の和歌（あるいはそれに準ずる形式の頌）を遺した事に並々ならぬ関心を持った様子が窺われる。

大拙居士は、妙好人の特質を「消極的、受動的、法悦耽溺性」という三点で総括している（『妙好人』14頁）。真宗は聴聞を旨とする宗派であるから、門徒は聞法を励行する。当然、妙好人は説教との接点が多かったであろう。長年聴聞するうち、自分の中で信仰の体系が出来上がり、それが言葉として迸り出るのであろう。直林師（2019）は副題でそれを「日暮しの中にほとぼしる真実」と表している。妙好人の傾向として「比較的文学に乏しい」（大拙居士『妙好人』一頁）と指摘されている。これは大拙居士の主観的な感想であって、「妙好人」と称される人物像の全体とは言えない。どうやら、大拙居士にとって「妙好人」とは、浅原才市翁のような人物という固定観念が植え付けられたようである。後に直接引用するが、市井の妙好人によって書かれたものには仮名が主体で漢字は最小限、時には我流の表記も見られる。一読すれば、なるほど純朴な味わいである。しかし、そうでない書き物も遺されている。妙好人の信仰は豊かな物質生活からよりも、「普通に忍苦と認められる生活状態」（同12頁）から生じる。門徒はそれを不平と訴えるよりも、却って「有り難い、勿体ない、忝い」という法喜禅悦の気さえ抱く、という。上掲(1)の生没年代を眺めても、斎藤政二翁を除いて太平洋戦争開戦までの生涯である。時代背景を考えてみても、物質的に恵まれた生活からは縁遠いのが妙好人というが如きである。妙好人像については、最終節で纏める事とする。

もう一点(1)に挙げられた妙好人像から共通点を探るとすれば、いずれも京から離れた地で生涯を暮らしたというところであろうか。十人のうち「大和、三河、石見、讃岐、長門、因幡」というように旧国名が冠せられている事で、どこで生まれて暮らしたか苗字替わりになっている場合もある。その他は、道宗翁が越中の五箇山、椋田與市翁が近江の坂田郡、才市翁と斎藤政二翁が石見国である。大和と近江は京の隣であるが、他はいずれも離れた場所である。これも偶然であって、妙好人たるの必然ではないであろうが、「鄙の土地で地に足の付いた暮らしをしている篤信の人」というような共通点が浮かび上がってきそうである。以下では『日本的靈性』に倣い、道宗翁と才市翁の妙好人ぶりから見ておきたい。

道宗翁

道宗翁は蓮如上人と同時代の人であり、永正十三年に没している。今から約五百年前である。時代的には、妙好人の祖とも言うべきである。上人のお側にあるときは警護役を務めたり、弟

子として教えを請うたというような経緯が『御一代記聞書』に記されている（大拙居士『妙好人』236頁）。道宗翁以外で（1）に揚げられている九人は、そのように歴史的人物から直接に教えを請うというような立場にはなかった。その意味では、道宗翁は特別な存在である。

越中の五箇山は冬になると雪に埋もれる土地であるが、月に一度は七里離れた井波別院までお勤めに通ったという。赤尾の里は、その五箇山でも飛騨に近い、最も奥まった地であった。道宗翁は刻苦勉励の人であった。蓮如上人の御文を二卷二十三通写し、お寺に所存していた。それだけでは足らぬ、上人直筆の御文章をと懇願したが、上人は「文ハトリオトシ候ホトニ、タゝ心ニ信ヲタニモトリ候へは、取りオトシ候ハヌ」と返した。文に書かれたものではなく、信心こそが根本であるぞよ、文はなくとも直々に教えは伝えるというお諭しであった。しかし翁が翌年上洛した折に、一文を認めて下賜されたという。また直林師『妙好人』によると、蓮如上人は三十歳前後の道宗翁を評して「後生ヲ大事ト思テ、仏法ニ心ヲカケ此六年ノサキヨリ当年マデ、毎年上洛」と褒めていたという。

道宗翁の篤信ぶりを村人が慕い、書き物として纏めてほしいと所望したところ、「思立候条々」という二十一箇条に認めた。藤師の伝によれば、文亀元年十二月廿四日思立候條とある。蓮如上人御遷化の二年後である。後の才市翁に比べても、二十一箇条は体系的で思索的である。先の「文字に乏しい」という妙好人の共通点からは外れている。藤師より、主な条を引用する。原文が仮名の語句を漢字にしてあるのは「冥の照覧」、「理非」と「睡」である。

後生之一大事、命のあらんかぎりゆだん有間敷事

^{ひきたつる}引立心なく、おうやうに成候はゞ、心中を引やぶり可^{まゐる べき}参事

心にひいきをもち候て、人のためにわるき事仕間敷事

^{みやう せうらん}冥の照覧と存候て、人知り候はずとも悪しき事をつかまつるまじき事

理非をたゞさず、あしき事^{しやうたう}の出来候はん座敷をばのがれ候べき事

あやまつて睡をはたらき、ねぶりふせり候て、此一大事を思ひまいらせず、いたづらにくらし候まじき事

我をにくみ候はん人をにくみをし候はんやうに、心中を持候まじき事

ねがはくは、御じひを別してかけられ、ひがめるかたへやらずして、おしなをして給り候へかしとおもひまいらせ候事、他の事なく候

藤師の評は「まことに切々として胸に迫るものがある。これらの素朴な表現のうちに宗教者の信仰と生活の規範が深切重厚に言ひ尽くされてある」とされている。蓮如上人直々のお教えであるだけに、重みを持っている。根本は後生の一大事であり、片時も忘れてはならないことを肝に銘ずべし、である。一般則としては、他人に悪い事をしない、誰も見ていないと心得て悪事を働くべからず、物事には是非の判断をすべし、居眠りなどはしないように、自分を憎む人を憎み返しても何の得にもならぬ、等々と並べている。これらに加えて直林師は、第七条として「仏法の方をば、いかにも深く重く信仰申し、我が身をば、どこまでもへりくだり候て、たしなみ申すべき事」というように、念仏行者の心懸けを説いている。「たしなみ」は、後述する『御一代記聞書』でも言及されている。

そして大拙居士は次のように、二十一箇条目の結びを現代語訳されている（245頁）。

世間法をよく守り、また外面には自分の所信を見せびらかすことなく、ただひたすらに内心に一念のたのもしさ、ありがたさを包んでおけ

これはどの宗派においても共通する、信仰を守る者としての一般的な戒めであろう。そうであるとしても、門徒の心得を二十一箇条に順序立てて記すという事そのものが「自信教人信」の実践と言えよう。

直林師『妙好人』によると、道宗翁は「只一ツ御詞ヲイツモ聴聞申ガ、ハシメタルヨウニアリカタ」く聞法した、と伝えられている（道宗翁の項）。同じ内容のことを何度か繰り返して耳にしたとしても、まるで初めてのように有り難い気持ちであったというのである。考えてみれば、仮に同じ内容であったとしても、聞く身としては同じではない、そうすれば心を新にして中身を噛みしめる、と心懸けるであろう。

上掲にもあった『蓮如上人御一代記聞書』には、次のような条が伝えられている。

赤尾の道宗申され候ふ。一日のたしなみには朝のつとめかかさじとたしなむべし。一月のたしなみにはちかきところ御開山の御座候ふところへまゐるべしとたしなめ。一年のたしなみは御本寺へまゐるべしとたしなむべし。

ここで繰り返されている「たしなみ」とは、「日常生活の中でふと懈怠心が起こるとき、忘恩の我が身を仏智の前で見つめ直し、また報恩の念仏を申されるようにしてくださる如来のおはたらきをいうのであらう」と直林師は解しておられる。日々は朝夕の勤行、月に一度は親鸞聖人所縁の地にご参詣、年に一度はご本山にご参詣という、門徒としての心懸けを諭すものであらう。

道宗翁の時代には「妙好人」という言葉すらなかったが、蓮如上人のお側にあって直々に御教えを伝えられたという立場にあられた。僥倖であり、一身の冥加と言うべきであろう。

浅原才市翁

次に、浅原才市翁に目を転ずる。才市翁は幕末の嘉永三年、石見国大浜村に生まれた。十八、九歳頃から聞法に勤めたものの、後世に遺るような自分の信心を書き留め始めたのは五十を過ぎてから、という。その頃には下駄作りを生業とし、下駄を削る際の本屑や鉋屑に思いついた事を書き留め、夜にそれを小学生用の帳面に清書するのを無上の楽しみとした、と伝えられている。日々の生業を大切に、その中で信心に喜びを戴くという、妙好人として理想的とも思える日暮らしであったものと思われる。まずは、素朴な歓喜に溢れる一首を見てみよう（『日本的靈性』254頁、原著の四行組を二行に改めた）。

歓喜の御縁にあふときは、 ときも、ところも、ゆわずにおいて、
わしも歓喜で、あなたもくわんぎ、 これがたのしみ、なむあみだぶつ。

全体は七五調で、いかにもその場で口遊んだというような軽い味わいである。木材に鉋を掛ける折りも、御名号を唱えながら楽しげに手を動かしていたであろう、というような風景が目には浮かぶようである。御名号は、全書を通じてほとんど仮名で書いてある。内容は、なにも付

け加えるべき説明が不要であろう。また「ゆわずにおいて」などと普段の話し言葉そのままを字に写すのも、味わうべきであろう。

次はやや長めで、大拙居士『妙好人』からの引用である。全体は四聯で成っているが、各聯の始まりは○で記す。

○わしのころがあなたのころ あなたころがわたしのころ

わしになるのがあなたのころ わしが阿弥陀になるじゃない

阿弥陀の方からわしになる なむあみだぶつ

○世界も愚痴で、わしもぐちで、阿弥陀も愚痴で どうでもたすける愚痴のおやさま
なむあみだぶつ

○あさましは言ふも言はんもあさましや 凡夫の自体これがあさまし

○鐘の音みだのよびごゑございそく ごくらく池中のたのしみのこゑ
なむあみだぶつ、なむあみだぶつ

初聯は、自分と他者を区別せず、阿弥陀如来とも一体化するという境地を謳っているように味わわれる。第二聯の「愚痴」は、愚かという意であろうが、他力本願の本源である阿弥陀如来までを愚痴と一括りにしているのが独特である。第三聯、「あさまし」というのも自らを省みるについて欠かせない決めつけであろう。自省の念で振り返る時、常に「あさまし」と自覚するのが門徒としての嗜みであるように思われる。第四聯、「ごくらく池中」からは『仏説阿弥陀経』に描かれている極楽浄土の有様を連想する。曰く、七宝の池あって、八功德水その中に充滿せり、四辺の階道、金銀瑠璃玻璃をもって合成せり、池の中の蓮華、大さ車輪の如し、青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔、しかしながら、全体としては四聯を通して有機的結びつきがあるとは言い難い。それぞれ思いついたことを即興で書き付けたような様子が窺えるのである。ただ、翁の心持ちはそのままに伝わってくる。聯毎に、思いが四方八方に翔いていくようである。

前段の「あさまし」について、翁の言葉が遺されている。大拙居士『妙好人』第三章である。傍点は原文のままであるが、加筆された旨の断りがある。

「あさましはなあ、あさましであっても、お慈悲があるからなあ、さうしてお慈悲が即ち歓喜なのであるからなあ。自分は邪慳のものであっても、地獄のものであっても、お慈悲の方へ引かれて居るものなのだ。それであさましが出たり、よろこびの歓喜が出たり、あれかと思へばこれ、これかと思へばあれ。わたくしがほ（自分の方）と云ふ立場からすると、何だかかんだか、ちんぷんかんぷんで、わかりやしません。が、このわからぬところで、この世を暮して行く自分には、何もかもらくらくだ。法の真只中でくらす佛縁に会った自分――南無阿弥陀佛そのものを体験した自分――には、何れもがらくらくだ」

これは一続きの長い談話であるが、徹頭徹尾論理が通っている。目の前で話した通りを再現している態である。始めに「自分はあさましい」という命題を立てて、それを三段論法によって昇華していくかの如き構成になっている。そしてその思いを歓喜に転化するというのである。しかしその転化は一挙に進むものではなく、どちらか判じ難いような、両方が入り交じってい

るようである。結局、その入り交じっているような混沌に暮らすのが現世、と半ば達観しているのであろうか。喩えてみれば、海水と淡水が入り交じっている汽水域とでも言おうか。達観した境地が「楽々」と自らに言い聞かせているようである。

引用を続ける。同じく「生ける妙好人」からで、改行は適宜省いて空白を置いてある。

「わしやまんだごくらくをしらんが、 ごくらくは、どこかな」
「こんなばか。 おどりや、まんだ、ごくらくを、しらんかい。
だいぶん、ばかだの。 ごくらくは、なむあみだぶつが、ごくらくだや。」
「ふん、そうかい、 そりやそりや、ありがたいの、ありがたい」

会話体で二人が喋っているような態であるが、随分と乱暴な話し振りである。特に対称詞の「おどりや」は大坂近辺、泉州辺りでは「おんどれは」の音変化形で、最も卑罵度が高い部類である。しかも馬鹿呼ばわりである。しかし言わんとしているのは、極楽は遠いところにあるのではなしに、お念仏を称えたその場所が忽ちお浄土になるという教えなのである。乱暴な言葉とは裏腹に、即得往生の心得をたった一言で言い尽くしているのである。

ここで『日本の霊性』に紹介されている才市翁の衆生済度論について見てみよう（274～275 頁、括弧内の補足は原著、改行は改めてある）。

「さいち三おすかな」
「へ、わたしやゑにをります。ご主人様はいますずであります。しゅ上さいどに出ておってあります。も（う）帰てであります。ま、ごゆ（つくり）になされませ。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。も（う）帰てでありました、ありました」

このように、独特の書法である。「ゑ」は家、「すず」は留守、「しゅ上さいど」が衆生済度である。「出てをって、帰（っ）てで」における敬語は、西日本一帯に見られる「テ」敬語である。一行目「おす」も京風の敬語表現である。素朴に味わえば、誰か隣近所の人が才市翁宅を訪ねてきての問答という態であろう。「ご主人様」とは阿弥陀如来で、どこか余所に衆生済度にお出かけになって、ここには居られない、しかし暫くするとお帰りになった、これで才市が済度して貰う番になった、という具合であろう。大拙居士も種々の角度から解釈を試みておられるが、一時的に阿弥陀如来が才市翁宅を留守にするという事は、その間は才市翁は如来の済度に与る事はできない、という理屈であろう。しかし、長い留守にはならないで間を置かずして如来様がお戻りなされた、またこれで自分をお救いくださる、という心構えであろうか。間断なく信心に励むというよりも、「あそび」という一種の余裕を持った態度であると言える。巧みな比喩である。

もう一つ、才市翁の譬喩と言えこれを外すことは出来ない。

かぜをひけば、せきがでる。
才市が、御ほうきの、かぜをひいた。
念佛のせきが、でるでる。

二行目「御ほうき」は「御法義」である。風邪を引いた折の咳までが「南無阿弥陀佛」のお念佛になるというのである。これは百年前に西班牙風邪と恐れられた流行性感冒の時期であった。恐ろしい流行病さえも御法義に絡め取ってしまおうという、豪儀な信心である。

しかし現実にはこの折、翁の病は重篤であった。七十の坂を越えていたところに、世にも恐ろしい流行病が世界中を席卷したのである。後述の寺本慧達師が見舞いに訪れた折りの話である。翁は「今度うまいことをさして貰う思いましたな」と語りだしたという。大拙居士『妙好人』に収録された楠恭師「寺本慧達氏を訪う」からの引用である。

「二、三日前に医者に来て、わしの脈を診て、今夜あたり危いから、親類縁者や知合いに知らせた方がよからうというているのが、わしの耳に聞こえるんですわい。それでわしは、これはうまいことをさせて貰うと思いましたな。

そうこうする中に、わしは余程よく睡ったでしょうわい、何も憶えずに、ぐっすり睡ったようでした。誰かわしの手を握っているように感じて目がさめましたら、夜明け方のようなようでしたが、その時わしの手を握っていたのは医者でしたわい。そうしてこういうのがまたわしの耳に聞えました。こりゃ脈が十分しっかりして来たようだ。この分ならまた持ち直します。それでわしは、これは御恩報じが足らぬので長生きさせて貰わにやならぬと思いましたな」

語り口は「親類縁者に報せる」という段も「持ち直した」という段も、どちらも淡々としていたという。本来の生命力で持ち直したものであろう。往生を遂げるのが「うまいこと」であり、「御恩報じが足らぬによって長生きする」というのは、門徒としての逆説的達観であろうか。一般的には「老少不定」として、年若うして往生するのも定めと説いて、世は無常なりと教えるものであろう。その伝でいけば長生きするのは有徳の賜と考えるのが常道であろうが、そのような常識に囚われていると、取り立てて語るような逸話にはならないという面もあるであろう。

このように妙好人という生き方は、第一節で触れた「前近代のわが国では、宗教・生活・娯楽(芸能)は一体であった」生活を実践していたと行うことができる。才市翁の境地に至っては、自らの信仰を文章化する事によって一つの芸術あるいは芸能とも言える領域にまで高めたとも考えられるのではないであろうか。

最後に、一首を引用しておく。白川師(2015)129頁からである。冒頭の「いち」は才市翁自身であろう。

いちがりん終 しぬるころが しなぬころに してもらう
なむあみだぶつに してもらう

安心決定によって、いまわの恐怖を乗り越えたいという心持を詠んだものであろう。最期まで妙好人としての生き方を貫いた、天晴れな生涯である。

道宗翁と才市翁はこのように別格扱いとして詳述されているが、直林師の著にある残り八人について以下に簡単に纏めておく。

大和の清九郎翁

大和の清九郎翁は延宝八年の生まれで寛延三年に没している。記録に残っているのは今から約三百年前であり、道宗翁の時代からは二百年ほど後になる。清九郎翁の生き方は四十年ほど後である享保六年生まれの学僧仰誓和上の心を捉え、初の妙好人伝が編まれることになっていく。和上は、篤信者であったという清九郎翁の噂を聞き及び、二度に及んで大和まで足を運んだ。清九郎翁が没する前年のことであった。清九郎翁に接した和上は「歓喜ノ泪ニムセビ」、「吾身ノ浅マシキコトモ実ニ思ヒ知」らされたという。

清九郎翁、生まれは大和国高市郡矢田村であったが、幼少の頃に母の生地で会った丹生谷村に移り、幼い頃に父を亡くした。母の生家は太谷派因光寺の門徒であった。やがて下市近辺に奉公に出たが、母を思いやって仕事を終えた夕方に奉公先から母の元に帰り、身の回りの世話をし再び奉公先に戻ったので「モハヤ加減モ損シタル冷ナル」夕餉を感謝のうちに食したと伝えられている（直林師の著）。しかし生来読み書きや感情もままならなかった故か、丁稚奉公を辞めてしまい次第に身を持ち崩していった。母はそのような息子を立ち直らせようとして、法座で知り合いになった女性と娶せた。それでも清九郎の暮らしぶりは改まらなかったが、夫婦の間にこまんという女の子が生まれた。その連れ合いが病に斃れて世を去ったのを契機として「我に先達ハ知識なりといひて、法縁を慕ふ」と改心したという。それから後に、妙好人としての生き方が始まって今に至るまで語り継がれているのであろう。

更に、娘のこまんについても連れ合い選んで自分自身と重なるような由縁が伝えられている。こまんの相手は、無頼者と悪評高かった久六という男であった。その頃は翁が篤信の門徒となっており、日々拝読していた御文章を、久六は事もあろうに燃えさかる囲炉裏の火に投げ込んでしまった。翁はその御文章を火の中から拾い上げ、「如来の凡夫済度」という御苦勞と重ねて味わわれたという。これを契機として久六も改心して念仏者になったというのであるから、自分だけではなく周囲に影響を及ぼすような存在になっていったという事績である。

清九郎翁の人となり伝える逸話が残されている。大和を訪れた太谷派十七世宗主真如上人から直接に言葉をかけられて感想を求められた翁は、「ナルホト難有嬉クハ候ヘトモ、是ヨリ他ニマタ難有コトノ候也。ソノユヘハ、カヽル悪人ノ一念^{ありがたく}帰命ノ信心ヒトツニテ助玉フ如来ノ御恩ハ、タトヘンカタナク難有シ。此ノユヘニ、ソレニ^{あわせ}比校テミレハ、ゴ門跡様ノ御言ハサホトニナキ也」と答えたというのである。一門徒にとって、ご門主というのは仰ぎ見るような存在であり、直々に言葉をいただくというような機会は得難いものであろう。そういう常識を覆すような言動が、妙好人たる所以であらうか。一面では、怖い物知らず、「門徒物忌み知らず」を地で行くような言動である。「カヽル悪人」とは翁自身を指しており、悪人正機説を踏まえていると言える。悪人であることを自覚し、阿弥陀如来のお助けに頼るのみという真宗教義の基本に立っている。

寛延元年の春、翁は玉譚和上（後述）に伴われて越中に下った。翁は齢七十にして、百里の道程であったから和上は「さぞかし草臥れたであらう」とご下問あった。翁は「身は草臥れても心は聊かも疲れませぬ。拙者老体である故に勞しく思し召されましようが、形は七十、心はいつも十八にて勇ましく称名を喜ばせていただきます故、嘗て草臥れるということを知りませぬ」という答えであったという。信心が年を取ることをさえも乗り越えている、という自覚が窺われる。

また或る日は川を渡らねばならなかった。余寒厳しい頃とて、川の水は氷のように冷たかつ

た。和上は「壮年の拙僧でさえもこの川水の冷たいには随分困る。ましてそなたは老体のこと、さぞ難儀であろう」と気遣った。翁の答えは、「聊かも難儀とは思いませんぬ。もしこのような寒い時分に川を十度渡らねば助けずという仏の御誓約ならば、我が身のような浅猿しいものは二つ三つ渡ればもう大儀にありましようが、川一つ渡る苦労も要らずに、このまま助けたまう御恩の深さを思えば、この川五つや六つ渡るなどは物の数でもありませんぬ」とあった。何事も仏恩に返して物事を見るという信心の徹底ぶりが窺われる。

藤師は、この挿話で次のことを連想されたという。越中下りに先立つこと数年、霜月二十七日は親鸞聖人ご命日のお逮夜であった。翁は丹生谷で仏前に座って通夜をしていたが、寒風激しく、白雪霏霏として降ってくる。その時思うようは、「御開山聖人が雪中に石を枕にして臥したまい、眠れぬままに如来の御大恩を喜ばれたのも、末代の我らが為と承る。聖人御在世の御艱難を少しなりとも我が身に受けて喜ばせていただくのは今宵である」そう考えつくと翁は着ていた布子を脱いで裸になり、積もる雪中に蹲って声を震わせつつ念仏して御恩を喜んだ。その夜は子の久六も隠居家に泊まっていたが、真夜中にふと目を覚まして念仏の声を聞きつけて外に走り出してみると、父親が裸で雪中に寝転んで念仏している。驚いて父の手を取って内に引き入れ、布子を着せて、これは如何なることぞ、と尋ねれば、「祖師聖人の御苦労を偲びたいと思いついたのじゃ。それも今夜に限り雪がこのように積もったので、ふと思いついた」という返答、親子して念仏して喜んだという。なんとも、常人には思いつかないような行動に出たものである。

仰誓和上が、玉譚和上に伴われて越中に巡礼した折のことを「サゾ先々有り難キ同行ニモ出合ヒ玉フラン」と尋ねた。越中下りの翌年であった。翁の答えは「何方モ御繁昌ニテ難有候カ、越中ノ衆ヨリモ、先ツ私カ難有候ヒシ」と答えたという。これも、自分を謙遜して「はい、行く先々で有り難いご同行がおられました」というように返すのが常識的であろう。ここでも、妙好人が常人の意表を衝くという逸話になっている。和上の感想は、「コノ一言マコトニ肝ニ銘シケリ。拙僧ナトハ、タ、他人ノマメヤカニ信スルヲミテウレシカル心ナルユヘ、余所ノ繁盛ノコトノミヲ喜テ、我ガ身ノ上ノコトハ心付サル也。コノ男ハ隣ノ宝ヲカソヘス。タ、何ニツケテモ自身ノ往生ヲ喜ぶフコト、マコトニアリガタキコト也」というものであった。翁が考えたことをそのままに受け容れることによって、翁と同化していると言える。これは、『歎異抄』後序にある「弥陀の五劫思惟をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなり。さればそれほど業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめちたちける本願のかたじけなさよ」と通底する思考であるように思える。つまり、自分を中心にして考えるという方向性を前向きに捉えんとするならば、自分自身を世界の中心に据えて、周囲との関係を相対的に捉える思考法とでも言えようか。清九郎翁が、『歎異抄』という書物を直に手に取って親しんだという可能性は考えられないが、説教などの席でそのような考え方に触れていたと想像する方が自然であろう。

三河のお園媼

直林師の年代記によると生まれは安永六年であるが、藤師は没年から逆算して安永か天明頃としか特定されていない。没年は幕末の嘉永六年、安永六年生まれとすると行年七十七歳である。清九郎翁より百年以上、後代の同行である。

藤師の説くところによると、「あんたのお師匠はどなたで御座いますか」という問いに対し

て「わたしの師匠は三文の柱暦のようなものであろうぞえのう」という答えであったという。これは、師匠は誰でも柱暦のように間違いはないというように解されているが、当時の碩学であった香月院深励和上や開悟院正慶和上の教えに感化されたものと察せられる。ある折りに媼は蓮如上人の御文章に「往き易くして人無し」とあった教化に不審を起し、六十里の道を遙々と京に上って香月院和上の教えを請うた。和上は「往き易くして人なしというのはなあ、お前やわしがまだ飯食うて娑婆に生きておるさかい、お浄土に人がないと仰せられることじゃぞ」とお諭しになったという。媼は「それではこの園がまだ飯食うて娑婆に生きているからお浄土に人がないとは有り難い、有り難い」と躍り上がって喜んだ。ただその一言を聞くために、千里の道も遠からずと足を運んだのであった。

もう一話、長くなるが藤師から引用しよう。三州高棚村空林寺の住職がある折り、同行衆の計らいでお園媼を寺に招いた。次に、二人が向かい合って話しているように再現してみる。

住職「今日御苦勞をかけたのは余の儀でない。恥ずかしいことではあるが坊主にうまれながら、わたしには仏法がないので、只今困っている事情がある。どうぞ仏法に入る近道を聞かしてくれ」

媼「わたしも仏法は少しもありませぬ。仏法がない故に仏様に助けられるのが嬉しいばかり」

住「そんな薄情なことを言わずに意見なりとして下され、わたしには本当に仏法がないのじゃから」

媼「わたしに仏法があると思うて呼びつけなされたのか。それは間違いと申すものじゃ。嘘でも何でもない。わたしには微塵ばかりも仏法がない。ない故に仏様に助けられるが嬉しいより外はないわいのう。まあ今日は寒いで帰ります。御免下され」

ここでお園媼は言葉通りに退去している。しかしこれにはまだ続きがある。住職は同行衆に向かい、この話をして「坊主というのは悲しいものじゃ。両手をついて尋ねても聞かしてくれぬ」と嘆いた。これに対する同行の一言が核心を突いていた。

「それほど甘^{うま}いことを聞かせてもろうて、それが喰^あわれぬというのは、なるほど貴師^{あなた}に仏法がないからじゃ。これから聞いて仏法があるようになってから往生するのは回り道というものじゃ。今の仏法のないままで助けられる、これほどの近道を教えてくれるお方がどこにあらう」
住「ああその事であったかや。わたしは仏法がないということだけを聞いて、仏様に助けられることを聞かなんだ」

ここでは、お園媼よりもこの同行が理を悟っていると言える。それを住職に噛んで含めるように論しているのは、常と立場が逆転しているようにも思われる。即ち、住職たる者は同行を導いて悟りを授けるべき立場であるべきを、逆に同行衆によって教え諭されているような展開になっている故である。他方で考えようによっては、どのような立場にあっても虚心坦懐に先達の考えに耳を傾けるべき姿勢というのは絶対的真理であろう。

同行衆が法談義をしている傍らで僧がこれを耳にして、問答したという話が伝えられている。同行衆の一人がお園媼であった。

僧「有り難いことを聴聞した。まことに御相伴を致した」

園「御相伴とは如何なる御心得でありますか。御相伴では今度の往生は覚束ない。我れこそ本願の正客なりとお受け出来てこそ往生一定と申すものじゃ」

僧「まことに有り難い御意見を受けました。これはわしの生涯の仕合わせである」

ここでも、相手が僧であろうが誰であろうが自分の思うままを素直に口に出す様子が見て取れる。僧が「御相伴」と気軽に口にしたのが気に障ったようで、媼は「そのように他人事と受け止めるのではなしに、自分事として往生の大事と心得ねばならぬ」と諭しているのである。これは「弥陀の五劫思惟をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなり」という道に通じるであろう。

次はお園媼が同行を教え導いたという話である。伊勢の同行が出離の一大事に悩み、御教化を素直に受け取ることができぬと苦しんでいた。そこでお園媼が言う。

「わたしは屹度安心の出来る秘伝を知ってゐるが、そなた二三年つゞけてやる料簡はないか」

「後生の大事のためにはどんなことでも致します」

「お差し支えなし、御註文なし」といふことを、二三年言ひづめに言ひなされ」

同行は喜んで帰ったが、三四日たつとまた訪ねてきた。

「仰せに随ふて三日の間朝から晩まで言ひづめにしたが、何とも御座りませぬ。胸の中は相変らずでござんす。こんなことでよう御座りますか」

「お差し支えなし、御註文なし」

「それでも何とも御座りませぬ。へんてつもない心中で御座ります」

「お差し支えなし、御註文なし」

そこで同行は、初めて心が開けて喜び勇んで念佛したという。教えは「お差し支えなし、御註文なしと二年でも三年でも言い続けること」であったのに、教えられた同行は三日で音を上げて泣きついてきた。そこでお園媼は教えを实践して「お差し支えなし、御註文なし」と返す。まだ同行は悟らない。もう一度繰り返したところで、やっと真意を理解した、という運びになっている。教えの根底は「ありのままを受け止めて、あれこれと詮議することを止めよ」であり、それを徹底するからには二年や三年の辛抱、という筈であった。しかもそれを「言ひづめに言ふ」というので、一日中でもそれを繰り返して実践せねばならぬのである。それを即席に冥加を求める同行が責められるべきであろうが、お園媼は根気よく同じ教えを繰り返すのである。最後はそれが功を奏して、真意は伝えられたという結末に至った。お園媼はこれを体得していたので、妙好人として世に知られるようになったとも言えよう。

お園媼臨終の際に、ある人が「領解を一言聞かせてくだされ」と頼んだ。返答は「私は領解も何もない。一生の間たゞ無駄骨を折っただけぢやわいのう」というものであった。これは一面では、悟りを得ることの難しさを慨嘆したものであろう。一生かけて悟りを得ようとしたが、叶わなんだ、と。他方ではしかし、生涯をかけたことに満足していたのではないであろうか。そうでないとすれば、生涯続けた信心を心底悔いているということになってしまう。悟りに至る道は半ばであったが、そこに向けて信心を続けたことは無意味ではなかった筈である。嘉永六年没、行年七十七であった。浦賀に黒船が来航した年であった。

石見の善太郎翁

石見という地は、「石州学派」と称されるように真宗教義を極めた土地柄であり、それに応じるかのように多くの妙好人も出ている。善太郎翁もその一人である。生まれはお園媼の五年後に当たる天明二年で、没年は三年後の安政三年、行年七十五歳であった。お園媼とほぼ同年代と考えて差し支えなかろう。家は那賀郡有福村にあり、千田村浄光寺の門徒であった。

善太郎翁が仰信篤実の大同行という評判を耳にしてある時、これまた篤信の人が訪ねてきた。藤師の筆によって、二人の問答を再構成してみる。

「善太郎同行はいづれに御座る」「わたくしでござります」

「そうか、お前様の家は何処で御座る」「わたしは家を持っておりませぬ」

「それでは誰かの家を借りて御座るか」「わたくしは如来様の家に置いてもらいます」

翁の言わんとするところは、「現世は仮の宿りでございます、極楽往生の折には如来様の元で何不自由なく暮らすことでありましょう」という悟りの境地であろう。それ故に、今暮らしている家は何ほどのものでもない、という考えでこのような答えになったものと見たい。これを聞いた同行は悚然として何物かに打たれたよう、泥の道に手をつけて落涙したと結ばれている。藤師はこれを禅問答と喩えられている。同行はただ単に「どこにお住まいか」と尋ねただけであったのに、翁は「如来様の極楽浄土に」という信心の意味合いで返したのである。同行はその意を悟って感涙に咽んだという一話に仕立てられている。

もう一話、藤師から引用する。近隣に弘法大師八十八箇所の一宇を建立して、多くの巡礼を集めていた。ある夜、二三人の巡礼が善太郎翁の家に宿を請うた。ここでも以下、再構成してみた。

善「大師様のご利益よりも尚有り難いことがある」

巡「どうぞそれを教えて下され」

善「およそ仏様にはどの仏にも仏の慈悲にはかわりはござるまいが、末代のわれらのような無善造悪の身で、仏道修行の一つも出来ず、日々三悪道の業ばかり作っているものを、このままの姿で救い上げて下さるのは弥陀の本願の外にはない」

巡「初めて生死の一大事に気が付いた、阿弥陀仏の本願念仏を頂くことこそ此の世の無常のご利益なれ」

そうして巡礼は八十八箇所巡りを止めて、喜びながら帰って行ったのであった。信心を自分一人に留まらせておかず、他人をも教化するというのは、還相廻向の実践と言えるであろうか。現代の感覚で考えると、先祖伝来の宗派を移るというのはそれ程簡便ではないように思うが、往時は事情が異なったものであろうか。藤師の筆にかかると、妙好人の詞がまるでその場に居合わせたかの如くに立ち上ってくるように感ぜられる。

翁は伊藤師『妙好人めぐりの旅』では有^{あり}福の善太郎さんとして採り上げられているが、そこで「草餅説法」が伝えられている。翁は生涯に九度も本山詣りを果たしたが、行き帰りに芸州可部で同行の家に立ち寄ることを常としていた。ある年、翁が立ち寄って出立した朝のこと、裕が一枚行く方知れずになった。お手伝いさんに尋ねたところ、「善太郎さんが持って行かれ

ました」との返答で、家の者も皆それを信じた。その後、可部の同行は有福温泉に湯治に来て善太郎さんの家に寄って盗みを咎立てた。すると翁は「そりゃ、悪うござんしたのう。家内がおりませんで、着物はどこかわかりません。これでまどいますけえ、どうかこらえてやんなさい」と裕の代金を弁償した。加えて、「何もないけど、この仏様のお下がりの草餅を持って帰って、家の人にあげてやんさい」と草餅を渡した。家に帰った可部の同行は「餅に罪はない、皆で食べよう」と配ったが、お手伝いさんだけがどうしても食べようとしない。理由を尋ねると、「私のような罪深い者がこの餅を食べたら、どのように恐ろしい報いを受けるかしれません。あの裕は、私が盗んだのです」と白状した。家の者は皆驚いて「善太郎さん、知らずにいたとは言いながら、散々罵ったことの恐ろしや。勿体ない、勿体ない」と詫びて後にお金を返したという。無実の善太郎さんに罪を着せるという後味の悪い挿話であるが、ここにも妙好人としての心得が話に盛り込まれているように思われる。即ち、どんなことがあっても他人に罪科が及ぶことのないように、仮に自分が罪を被ることになろうとも甘んじてそれを受けるという態度である。近代的な価値観から判断すれば、正邪を曲げて責任の所在を曖昧にするのは好ましくないと考えるであろう。しかしこのように、真理を枉げてでも利他を図ろうとする妙好人の考え方と近代合理主義の乖離が広がってきた事情が窺われる。

もう一話、短い挿話を記しておく。ある夜六部（巡礼）が泊まった。翌朝一里半もある荒相村^{あらわ}まで見送っていった。「何故あんな遠方まで送ったか」と尋ねると、「昨夜から弥陀本願の有り難いことを聞かしてやったがどうしてもわからぬ。今朝も送りながら、もう一口いったらわかるか、もう一口説いたら知れるかと思って行く間に、ついに荒相まで行ったのだ。しかしどう話してもわからなかった。無宿善とはこのことであろうよ。それにつけても、この善太郎は幸せ者よのう」と答えたという。法を説く余りに一里半もの道を巡礼を送って行ったというのであるが、なんとしてでも弥陀本願の有り難さを分かってもらいたいという熱心さが伝わってくる逸話である。そして結果は願うようにならなかったが、このような機縁に巡り会えただけでも仕合わせ者と得心する心根が奥床しい。その一心で、他事は上の空という境地は妙好人ならではであろう。

最後に、真義師が採録した翁の法語である。書き言葉ではなしに、翁の話し振りそのものを書き留めたという感触である。

をがんでたすけて、もらうにやない、
をがまれて、九ださるによらい三まに、たすけられて、まいること。
こちから、をもち、たすけてもらうにやない、
むこから、をもちわけて、をもちとられること、この善太郎。

「下さる、如来さま」など独特の音写である。それも含めて味わうと、醇朴な信心ぶりがしみじみと伝わってくるようである。真義師の編んだ『分陀利華』には、善太郎翁の逸話が長短併せて三十三遍箇条書きで伝えられている。ここで採り上げたのは、そのうち少数のみである。他も印象深い逸話ばかりである。

讃岐の庄松翁

時代は下り、讃岐の庄松翁は幕末にかかる寛政二年の生まれで明治初年までの生涯である。

真宗には大きな派だけでも十派あるが、庄松翁は興正寺派勝覚寺の門徒であった。讃岐国大内郡壬生村字土居の生まれで一生を独り身で通した。翁の来し方を記したのは、遙々松前藩から訪ねてきた徳太郎という同行で、後に諦順師が後編を足して『庄松ありのままの記』として今に伝わっている。藤師の評では、庄松翁は清九郎翁と並んで古今妙好人の双璧とも謂うべき、という絶賛ぶりである。

真宗教義史から、興味深い展開が見られる。翁は始め、身口意という三業において救済願求の心を表顕せねば救われぬという異安心に囚われていた。世に謂う三業惑乱である（朝枝善照師、全集第二巻）。ところが幸いにして檀那寺の弟子に周天という篤信の僧があつて、懇ろに翁を諭して正義に立ち返らせた。これを喜んで翁は逢う度に「周天如来、周天如来」と礼拝したという。その後ある折り、とある僧が翁に三業安心の是非善悪を問うたところ、「三業どころか一業もないには困る、困る」と答えたというのである。これは翁が自分の懈怠を省みて発した詞であろうが、三業安心を痛烈に批判しているところが痛快であるという藤師の評である。

遺されている逸話からは、ややもすると奇矯とも言えるような言行ぶりが窺われる。決して懇ろに語り、諄々と諭すという風ではない。詞に出すのがもどかしい折には、体で表現することもある。勝次郎という同行が「一念帰命とはどういう味わいか」と尋ねたところ、翁はすぐにご本尊の前にごろりと寝転んでみせたという。別の折にも、似たような問答が繰り返されている。富田村の菊蔵という同行と俱に三本松の勝覚寺に参詣した折、庄松翁が本堂で気楽そうに横になった。菊蔵同行が「庄松、それは勿体ない」と咎めると、「親の家じゃ。遠慮には及ばぬ、及ばぬぞ」というのが答えであった。先の折とは異なり、この折は言葉が付いていた。仏前と雖も極楽に導いて下さる親のような存在であるから、遠慮は無用という料簡であつたらしい。豪放磊落とも言える態度である。

翁は、口先だけで内容のない信者を立ち所に見抜くという鋭い勘を有していたという逸話も遺されている。ある人が「一心に阿弥陀如来を待み、昼夜念仏を唱えております。これで往生は如何でありましょう」と問うた。翁の答えは「劔じゃ、劔じゃと鞘つかむ、鞘は本地もの間に合わぬ、表通りは忝いが、善知識の教えをにぎり、弥陀如来の御実を貫わんのではないか」というものであった。五七調で、実に雄弁に教えを諭している。真実の教えを金身の劔に、表面的で通り一遍の信心は木でできた鞘に喩えている。実に巧みな比喩である。

もう一話は、例によって再構成してみよう。

庄松「安心は如何か」

同行「本願を疑いなく信じて、念仏を称えて喜んでおります」

庄「お前の安心を喩えて言えば、ある母親が息子を下関に奉公に出したが、子供可愛さの一心に心を込めて袷衣を拵えて送った。息子は着物を受け取ったが、母の真心を受け取らなんだ。それと同じことじゃ」

親の真心に気付かぬ子の愚かさ、という譬喩である。掬い取ろうという弥陀の本願を袷衣に託している。後にこの教えを子守歌にして、子を負うては口ずさんだという。「寒い、寒い。国がかわれば猶さむい。袷衣こしらえ慈悲までそえて。慈悲を取らずに袷衣取る。其処聞け、其処聞け」

もう一話も応答形式で再構成すると翁の話し振りが生き活きと伝わりそうである。泉屋又平

という同行があつて、翁を招いて法座を開いた。

泉「遠路ようこそ来られた」

庄「ようは来んぞ、来いと言うから来たのじゃ、して用事は何のことか」

泉「安心に不審があるので御招待申した」

庄「袈裟衣をかけた坊さんの御説法は不足なのか」

泉「いやいや左様なわけではないが、あなたは無我の同行さんと承り一言聞かせて頂きたく存じましたので」

庄「食食物のさし嫌いするは病の体じゃ」

泉「それなら誰方のお説教にも変り目はござりませぬか」

庄「何でも食うのも病の体じゃ」

見方によっては、ああ言えばこう言う、こう言えばああ言うという揚げ足取りになりかねない捉え所のない問答である。僧職でも何でもないう庄松翁のような在家の同行に一席を請うというからには、何処か常人の考えつかぬようなところを聞いてみたいという潜在的な意識が働くものであろうか。本職による正式な説法も聴聞したいが、偶には庄松翁のような独特の一席も聞いてみたい、というような気儘な信心ぶりの反映かも知れぬという印象も持つのである。口から出任せではないが、好き放題に喋るのを同行が半ば面白がり、半ば有り難がっているという気持ちがありはしないか。

藤師が清九郎翁と並んで古今妙好人の双璧と称したのは、或いは遺された逸話の多さにも拠るかと思われる。最後にもう一つ、引用しておく。翁が御髪剃を受けるために興正寺ご本山に上った折である。ご門主自らが剃刀を執られて順々に門徒の頭に当てていかれたが、翁の順番になった時、翁はご門主の法衣の袖を引いて「あにき覚悟はよいか」（傍点は原文）と問うた。するとご門主は後に「今わしの法衣の裾を引っ張った同行をここへ呼べ」とご命じになった。以下はそれ以降の問答を再構成した分である。

「今わしの法衣の袖を引っ張ったのはそちであるか」

「へい、おらでありました」

「何と思うて引っ張った」

「赤い衣を着ていても、赤い衣で地獄を脱^のがれることはならぬで、後生の覚悟はよいか、と思うたまを言うたのじゃ」

「さあ、その心持ちが聞きたい為にそちを呼んだ。わしを敬うてくれる人は沢山あれど、後生の意見をしてくれる者はそち一人じゃ。よく意見をしてくれた。しかしそちは信を頂いたか」

「頂きました」

「その頂いた相^{すがた}を一言申せ」

「なんともない」

「それで後生の覚悟はよいのか」

「それは阿弥陀様に聞いたら早うわかる。わしの仕事じゃなし、わしに聞いたとてわかるものか」

「弥陀をたのむというもそれより外にない。多くは我が機をたのんでならぬ。そちは正直な男じゃ。今日は兄弟の杯をするぞよ」

ご門主様を相手に「あにき」と呼ばれる大胆不敵さ、後生一大事の信を尋ねられても「わしの仕事じゃなし」と一刀両断に切り捨てて剛胆さなど、落ち着いて考えてみると翁の考え方を鵜呑みにするには危ういところもありそうである。しかも、例えご門主様であろうとも、罪が重ければ地獄行きは逃れられぬぞよ、と脅しているのである。あにき呼ばわりをされたご門主は、教義の問答を仕掛けた。庄松翁の答えは、人を救うのは阿弥陀様の領分じゃによって、救われる側のわしに尋ねられても困る、というもので一理ある。ご門主様は「多くの者は機を頼りとして悟ろうとする。そのような考えではならぬ。自分なりに考えて、頂いた信の相は無であり、後生の覚悟は阿弥陀様に尋ねるもの」と悟られたことであった。庄松翁の振る舞いを無礼と咎めるのではなしに、虚心坦懐に意見を聞こうという心懸けも立派である。

長門のお軽唄

長門国豊浦郡六連島は関門海峡に浮かぶ島で、お軽唄は享和元年にここで生を受けた。今から二百二十年ほど前である。家督を継いで養子を迎えたが、その夫が不貞に走ったことによって説法を聴聞する機縁を得たのであった。三十五歳の折に肺炎を患い、病の床で次のように詠んだ。藤師からの引用であるが、漢字は新字体に改め、仮名遣いは元のままとする。傍点も原文の通りである。

聞いてみなんせ、まことの道を、無理な教えぢやないわいな。真きくのがおまへはいやか、何かのぞみであるぞいな。自力はげんでまことは聞かず、現世いのりに身をやつす。思案めされや命のうちに、いのち終わればあとと思案。領解すんだるその上からは、外の思案はないわいな。只でゆかれる身を持ちながら、おのが分別いろいろに。おのが分別さっぱりやめて、弥陀の思案にまかせんせ。わしがこころは荒木の松よ、つやのないのがお目当てよ。きのふ聞くのも今日またきくも、是非に來いとおよび声。おも荷背負ふて山坂すれど、御恩おもへば苦にならぬ。高い山から御寺を見れば、御恩たふとや宝山。宝山には足手をはこぶ、むなしがへりをせぬがよい。まこと真実おやさまなれば、なにの遠慮があるかいな。おもふてみなんせ喜ぶまいか、丸のはだかの仕立どり。どんざきるとも御いはれきけば、きぬや小袖をきたこゝろ。狂人ばゞといはれたわしも、やがて浄土の花よめに。

話し言葉の七五調で、長い一続きの物語という趣である。傍点付きの「どんざ」とは地言葉で襤褸の意である。暖衣飽食よりも、虚飾を捨てて信心を深めよと読める。まずは自力門の批判であり、現世利益を求めることも戒めている。自力による種々の思案を止めて、阿弥陀如来のお力にお頼りするより他はなし、という力強い教えを身に付けている。「荒木の松」という譬喩は、樹皮に艶がないの意であろうか。ごつごつして決して滑らかではないが、頑丈である、とでも言いたげである。信心一途に歩んだ道を、「やがて浄土の花嫁に」と喩えるさまが健気に思われる。

直林師によると、お軽唄は俳句や和歌を習い、西教寺八世であった現道師によって筆記されていった。俳句十二句、和歌四十二首、よしこの節十六首、都々逸十八首などが残っているという。上掲の引用も七五調で、節談ではセリ弁と呼ばれる口調である。次のようなご法義歌にもその調子が見られる。

我が身領解は夕立雨よ 土のいらきに たまりゃせん
鮎は瀬に住む小鳥は森に わたしゃ六字の内にすむ

七七七五、七七七五と都々逸の字数に合わさっている。従って調子は軽いのであるが、内容は真宗の教えである六字名号を織り込んで味わい深い。お輕姫の生まれ暮らした六連島には鮎は居らず、この段は創作であろう。「いらき」も地言葉で、乾いている状態であるという。乾いた土に水が吸い込まれるように、み教えを吸収したという喩えであろうか。領解が恵みの雨となって、この身を潤すのである。我が身にとってみ教えは夕立雨のようで、乾いた土が吸い込むようである、と解いておきたい。

伊藤師は、末っ子である三男の亀吉に宛てた手紙を収録されている。十五歳で下関に奉公に出した折、姫は齢五十であった。

兎角お慈悲を喜ばしゃんせ。永い浮世と思わぬことぞ。亀は万年の寿命と聞けど、私もそなたも身は不定。今は一夜のかりの宿。やがてたがいの親里へかえるあいだの身のつとめ。朝は早起宵寝をせずに、誰のおうせもただあいあいと、返事すなおに諸事正直に、つとめしやるが忠と孝。海山を西よ東とへだつれぞ、南無阿弥陀仏にへだてなければ。 嘉永三年戊二月三日

母から末っ子への、情愛の籠もった文である。「おうせ」は仰せであろう。文面には、正直を旨として忠孝に励むというような世俗の教えも説きながら、明日をも知れぬ老少不定のならないが基底となっている。現世は仮の宿りで、往生によって極楽という親里に帰るというのも真宗が教える根本である。六連島から下関に渡るには、僅かな距離とは言え船に乗らねばならない。それさえも親子の間に隔てとして立ちはだかるものというような意識であったかもしれないが、如来の教えによってそのような隔ても乗り越えられる、と説いているように味わわれる。親が子を思う気持ちというものは、阿弥陀如来が凡夫を救うことと同じ心持ちであると言えよう。

夫との間にあった蟠りもやがて氷解し、俱に連れ立って法座に通う姿が見られたという。往生の際には「なきあとに かるをたづぬる人あらば 弥陀の浄土に、」と辞世を詠みかけて息絶えたと伝わる。幕末の安政三年、行年五十六であった。

近江の與市翁

與市翁は椋田姓で、近江国坂田郡入江村に生を受けた。天保十二年、二十七年後に明治維新が始まるという幕末の世であった。幼少の頃より求道の志厚く、二十歳頃には寺参りがし易いように兄の家を出て一人暮らしになった。所有する農地が狭かったので、一月を三分して十日は自家の畑を耕し、十日は人に傭われて賃仕事、残りの十日は仏法聴聞に明け暮れたとされる。言行録には、畑で穫れた大根を彦根や長浜の街へ売り歩いたり、入江を埋め立てて米原駅を建設する作業に従事した話が盛り込まれている。このような言行録は翁自身の筆によるものではなく、没後に近親者によって編まれた『與市話記』や手次寺住職であられた河村義雄師による刊本『是人名分陀利華――與市同行念仏抄』が遺されている。

與市翁が聴聞したのは、椿原了義和上（天保三年生まれ、明治十二年没）とその弟である能世溪真了和上（天保八年生まれ、大正二年没）の説法であった。真了和上が住した本願寺派浄

楽寺には、和上の説法に関する写本が遺されており、布教内容と妙好人の言行を対比できるといふ。まずは浄楽寺文書から引用する。

聞事モ不足 喜ブ事モ不足 チツトモ天窓ノ上ヲヌ不足ノ私ヘ 余ルモノハ間違セヌノ御慈悲
バカリ タラン私ヘ余ル如来ノ御恩徳

記録として詠むよりも、お説法の折に耳にするように音読すると、囁んで含めるような調子が伝わってくる。次は、『是人名分陀利華』に與市翁の言葉として伝わる。

お互いの頂きよう位は足らぬかてどうでもよいではないか。足らぬ所は親様がよいようにしてくださろうから。

本稿では、妙好人が耳学問で聴聞した説法を自分なりに咀嚼して身の内に取り込んだであろうという仮説から出発したが、ここにその例証が一つ見られた。悟りが足らぬ身に、有り余る阿弥陀様から分け与えられている、ああ有り難や、という信心の有り様を見て取ることができよう。

もう一話、説法との関わりを示す教えである。真了和上は「今ハヤフヤフ御慈悲ノ念力ニ引立テラレテ カヽル仕様ノナヒ私ヲ ^{このまま}此假ナカラ助ケルトアル 弥陀願力ノ不思議ソト」で、『與市話記』には「頃モ人事カト ^{いつ}思フテルト 御慈悲ガワカラン」と伝えられている。阿弥陀如来の本願他力は、常に意識して御恩を受けねばならぬ、というように常日頃から心懸けていたからこそ、このように口を衝いて実詞となるものであろう。

明治十二年、翁は本山から「法義篤信之上より真俗に付奇特之行不少候趣」により賞状と念珠を下賜される運びとなった。ところが「一把の大根を束にするにも大きなのを外に並べ小さいのを内に入れて全部大きな大根のように見せかけて、人目をごまかして高く売る工夫をしているのです。それを今本山から奇篤な同行じゃ、感心な信者じゃなど賞められて見ると、も早そんなことも出来なくなり、飯を食うに困ってきます」と訴えて固辞したという。現実に大根を売っていた経験を元にして、有りの俣を語っているのである。いかにも世俗の理であり、正直者の面目躍如というところである。

亡母三回忌の折、在家法座を開いた。進納した法礼が一円、当時としては大金である。「我々が仏説ヲキカサレテ 喜バセテ貰フカラ 我々ニ功德ガ有ルノジャカラ 先祖ノ御蔭ヲ忘レヌ様ニ 忌日ハ大切ニ努メネバナリマセン」と家族に語ったという。確かに、信心は普段の心懸けとして欠かせてはならないが、月命日、祥月命日、年忌というような節目はまた格別な意味を持っている。忌日を契機として、普段耳にする機会がないような法話に接するというのは、妙好人としては格別に有り難いことであつたと思われる。

翁は明治二十六年、臨終間際となった。真了和上は多忙を極める布教日程の合間を縫い、病床を訪れた。

付添看護人ノ話 與市ガ死病ノ際ニ 某僧ガ見舞ニ来テ曰ク「聴ケバ今度ハ余程ノ由ジャガ定メシツラカロウ 然シ最少時ノ間ジャカラ勤メテ喜バシテ貰フゾ」と云ヒマシタラ 與市ハ「ハイ」ト返事ヲシタキリ無言デアリマシタ 少時スルト 某僧モ帰ラレマシタ所ヘ 浄楽寺

老院ガ出遭ニ御越シニナリマシタラ 病人ハ顔見ルナリ老院ニ申サルニハ「只今某曾^{ママ}ガ来テ私ヲイジメテカエヒラレマシタ」ト云ハレマシタラ 老院曰ク「何ト云フテイジメタカ」ト尋ネラレタラ「平日デ際ヘ喜コベヌ私ニ 此ノ場ニ至テ「最少時ジャークラ心棒シテ喜ベ」トイジメテ 帰ラレマシタ

文の切れ目などが不明瞭で、少し読み辛い所がある。某僧は「辛いだろうが、少しの間であるから辛抱するように」と諭して帰ったようである。それを翁は「虐められた」と真了和上に訴える。この期に及んでも、翁は病に苦しみ安心の決定が出来ていなかったものであろうか。そうであるとなると、與市妙好人のような人物でも往生に際してどのような心持ちであったかを率直に綴っている一節であると言える。行年五十三歳であった。

因幡の源左翁

因幡の源左こと足利源左衛門――源左衛門というのは土地の習慣による通り名で、本名は足利喜三郎という――は、幕末の天保十三年、気多郡山根村生まれである。家業は農業の他に楮を材料として特産因州和紙を漉いた。安政六年に父の善助が流行病で急死し、十八歳で一家の担い手となった。その三年後に村内の小林くにと妻夫になり三男二女に恵まれるも、この子ら全員に先立たれてしまう。二度の火災に遭遇したことに加えて、八反あった田畑や持山も手放すという不運に見舞われた。以下の伝も直林師に拠った。

源左翁が仏法と縁を持った契機は、父が臨終の際に遺した「おらが死んだら親様たのめ」という一言であった。その時より「死とは何か、親様とは誰か」という疑問に取り憑かれ、一刻も止むことはなかったという。半年ほどして手次寺の願正寺を尋ね、住職の芳瑞和上に教えを請うた。住職は「源左、もう聞こえたな、有り難いなあ」と仰せであったが、当の源左翁には如来の声は聞こえていなかったのがあった。つまり、悟りというのは然るべき機縁を待たねばならぬもの、という定めがあったのであろう。疑問を持つことが第一歩であるが、そこから先もまた長かった。

悟りの機縁は、十年余りを経たある夏の日を訪れた。六把の刈草を牛の背中に負わせようとした折に「ふいつと分からしてもらった」というのである（柳宗悦と衣笠一省の著『妙好人因幡の源左』）。自分が刈った草の束は、本来は自分で背負うべきであるが、自分には背負う力もない。それを易々と背負ってくれる牛がここに居る。草束とは自分が重ねた悪業、牛はその業を引き受けて下さる阿弥陀如来のお姿――このように悟り、翁は「勿体なう御座ります。ようこそようこそ、なんまんだぶつ／＼」と喜んだ。疑問を抱いてから十年、常に考え続けてきた素地があつてこそ、一瞬にして悟りを得ることが出来たのであろう。

以下、翁の言行録である。自分は偽同行であると言う人に対しては、「偽になったらもうえゝだ。中々偽になれんのでう」。まずは「偽」であるという自覚に到達するまでが一苦勞、という示唆であろうか。例え偽であっても、同行と名乗るにはそれなりの自覚が必要という心持ちであろう。況んや、真の同行というのは遙かな高みである、という前提があろう。「おらがやあな底下の泥凡夫に、なにが仏になるやあな甲斐性が御座んせうに。だけっどなあ、親様が仏にしてやるとおつしやいますだけに、仏にして貰ひますだいなあ」。地言葉の口語は、所々分かりにくい。「おらがやあな」は「おらのような」、「仏になるやあな」は「仏になるような」であろうか。自分が凡夫であるという自覚こそ、極楽に往生する悟りであると明確に捉えてい

るのである。その折に口を衝いて出た「おのが使ひに、おのが来にけり」というのは、普段聴聞していた説法の賜であろう。これこそ、自分で悟らねば道は開けないという信心の核である。冬の朝、「親さんはないや、幾萬劫も氷の中で此奴にかゝらはつてなあ。寒いつちあな、仕事にかゝりや、ほっこり／＼するぞいのう」。これも理解に手間を要する。「親さん、云々」は阿弥陀如来の五劫思惟を指しているものと思われるが、氷の中で思惟した故に寒いという思い入れになっているのであろうか。思惟するからには体を動かしてはならぬが、なるほどそれでは寒い。体を動かして働いた方が、ほこほこして具合が良いぞという素朴な思いであると捉えておこう。

言行録には、まだまだ続きがある。何時、如何なる辛苦に遭遇したとしても「如来さんからの御催促で御座んす。之でも往生は出来んか、之でも出来んかと、御催促で御座んすわいなあ。ようこそ／＼、なんまんだぶつ／＼」と受け流していた。上述したように、田畑八反や山までも手放すようになるまで、並大抵の苦勞ではなかったであろう。それを受け止めるには、想像を超えた辛苦が立ちはだかっていたことであろう。如来さんからの御催促とは言うものの、現世では金銭的な苦勞となって押し迫ってきたのが現実である。それさえも乗り越えた信心の大きさを思う。

学問的な識見は乏しかったものの、揉め事の仲裁を頼まれたり困っている人に力を貸したりというような場面では活躍した。「御法話に來いつて招待があつて、ついて行くだが、人様から色々のお尋ねが出ると、する／＼と答えさして貰ふだがやあ、何にも知らんおらが云へるなあ、全く親様の御恩だで、有難いむんだいのう。我が言ひながら我が聞いて我が喜ぶ。我といふことはないだでう」。ここまでになると、無我の境地である。同行から教義について尋ねられているのであろうが、知らず知らずのうちにすらすらと答えてしまう。後から気が付くと、自分でも得心するような答えになっていた、という経緯であろうか。しかもその考えというのは自分のものではなく、阿弥陀様のお働きによって自分の口を借りて出たというような謙りなのである。

布教に出掛ける願正寺住職に、翁は「御院家さん、説教に出なはっても、おらが説教が上手だと思つてつかはんすなよ。おらがえゝちゆう説教をしなさんすなよ、ありのまんまを云つてつかんせえ、えゝ悪いは聞く人がよう知つとりますけんう」と忠告したという。布教に出る住職に説教をするというのも向こう見ずであるが、好悪は聴き手に自ずと知れるというのは道理である。虚勢を張らずに、ありのままに自分の信ずるところをお説法しなされ、という助言のつもりであろう。また、翁の口癖に「困つた時にや、お念仏に相談しなされや」というのがある。これも、念仏を称名するというのは阿弥陀如来のお力にお縋りすることだと諭しているものであろう。法を説くご住職に意見をするという豪胆さは、常識では計り知れない。八十九歳まで長生きし、昭和五年に没した。まだ百年経っていない。

斎藤政二翁

最後に採り上げるのは斎藤政二翁である。大正八年生まれ、昭和五十九年没であるから、まさに現代に生きた妙好人であった。大正生まれというのは廃藩置県成って久しいが、朝枝善照和上編になる伝記にも『安芸の妙好人』という副題が付いている。当時の山県郡雄鹿原村で生まれ、八歳までに両親を亡くした。その後は叔父に後見をせられ、二十二歳で近衛歩兵一連隊に入隊した。対英米開戦前年である。五年で敗戦となった。翁の伝記には、折に触れて詠んだ

短歌が伝えられている。安芸国広島に落とされた原爆については、五首が遺されている。

原爆の しげき生死の娑婆に出て えにし喜ぶ 親のみひかり
光にも 聖の光十二あり いとかなしきや 広島的光
核たやせ さげびや高し 広島のとわの平和を 親の誓に
反核と 求法にもゆる 安芸門徒 しんらん様に ひかれ渡る白道
人の智慧 すぐれし悪の 火となりぬ 核をたやさん 親の智慧かり

青春時代を軍隊の中で過ごし、郷里に原爆が落とされたという事実は翁の生き方にも大きな重荷となったことであろう。この五首にも、原爆の大きな陰を見て取ることができる。原爆を作り出すような科学力は、決して仏の道と相容れない、「世の中安穏なれ」という願いとは正反対である、という思いが滲み出ている。「戦争を終わらせるためには、どのような非道な手段を用いても許されるのか」という問いが根底にある。

数え六十三歳で大腸癌の摘出手術を受けて、日々の心境を歌に託し始めた。

桜咲き 人は生生の春なれど 病む吾は日を もだえつつ
病める日々 浄土をたのみ なおもまた 娑婆わすれられず 堪へる苦しさ

病の苦しみをそのまま詠み込んだ詞が突き刺さってくる。今でこそ癌は日本人のうち二人に一人が生涯の間に罹患し、治療法も発達して必ずしも不治の病ではなくなった。しかし四十年前は、告知するや否やで周囲が思い悩むほど重篤の病であった。我々が知るころでは、残された寿命は三年しかなかったのである。人は病になり、初めて健康の有り難みが分かる。それまで何ともなかった景色――毎年花を付ける桜にしても、秋の紅葉にしても――病を得て心に沁みてきた感慨は、単刀直入に口を衝いて出たものであろう。

おかされし ふかき病の身となりて よりおおいなる 仏をぞ観る
がんなりと 抱かれて今 まかせけり手術台 親と二人の心安さよ
導かる恵 恵と知らされる 恵多かり 恵ある世を

この三首もまた、病を詠み込んで切実として迫り来る。前二首と比べると、徐々に仏道に傾いて心の平安を得ようとする傾きが窺われる。釈尊在世の時代から、生老病死という四苦は人の世につきものであった。これは今後、科学文明がどのように発達しようとも変わるものではない、永遠の真理である。仏道は、その苦をどのように受け容れるか、どのように悟るかを考えてきた。三首目で「恵」と繰り返しているのは、病に苦しんでいるとしても生を受けたことそのものを喜ぶという心情を謳い込んだと思いたい。

翁はこの頃より『正信偈』、『浄土三部経』、『三帖和讃』、『教行信証』の書写に専心し、次のような諸歌を遺している。

よろこびや 老いの六十路の 坂を越え 法の御親に 会いしおどろき
仏説きて 二千五百の 歳を経て 教へ給えり 今日の吾が道

あでやかに うつし給へり 上の巻 まんだらの国 心あそべり
有田憂田 無田亦憂や 有宅憂宅 大経下の巻 今日の生活
観経に 九品九性の へだてあり 弥陀たのむ人 仏と一味に
りょうれようと 聞ゆる今日も 弥陀讃う 祖師の声なる 和讃なつかし
親が子に 残せし遺書を 今見たり 親鸞様の 教行信証

偈文や経文を筆写した後だけあって、字や言葉遣いに格段の変化が見られる。四首目、いずれの字も振り仮名があっても意味を取るのに苦労する。出典は大経下巻で、原文は「有田憂田。有宅憂宅。(中略) 無田亦憂、欲有田。無宅亦憂、欲有宅」とある。田があれば田を憂い、家があれば家を憂う。なければ、ないことを憂う。つまりどっちにしても、物欲に囚われることを憂いた句である。五首目は観経に拠って、定善十三観に続けて、上品上生から下品下生にまで九段階に分類し、それぞれに悟りに至る道を説いている。六首目の「りょうれょう」というのは擬声語で、和讃を読み上げる声を、このように写したものであろうか。七首目は親鸞聖人の主著である『教行信証』を遺書に喩えている。浄土三部経にしても『教行信証』にしても漢文であるから、意味を取るには読み下しせねばならない。『教行信証』は、読み下しても難解である。登山家が高い山に立ち向かうような覚悟がないと読み通すことは適わない。しかしそれを乗り越えぬことには真宗の真髓に触れることは適わぬのである。これを遺書と捉えるのは、自らの死期が近いことを自覚した政二翁の心境であろうか。その思いは、読む者に切実に迫ってくる。

安芸の生まれである政二翁、手次寺は石見国浄泉寺となっている。この寺に所縁がある仰誓和上、履善和上、才市翁への思いも詠まれている。

仰誓や履善つづける浄泉寺 弥陀の慈風に 吾も浴みけん
念仏の せき出る君の ありと聞く 大いなる慈悲 茲に今きく

一首目、仰誓和上と履善和上という親子二代が続いたご縁をそのままに詠み込んでいる。二首目は、才市翁が風邪を引いて出た咳が「なんまんだぶつ」の名号であったという逸話を下敷きにしている。先人所縁の寺にあって、そういう先人を慕う気持ちが滲み出ている。

暫くは念仏と聖教筆写で穏やかな日を過ごしていたが、癌が再発転移して再入院となった。その直前に詠んだと思われる一首が、辞世のようである。

さんさんと 慈光輝く白い道 しんらんさまと 進むうれしき

もう余命が短いことも重々悟っておられたのであろう。淡々とした詠みようのように味わわれるが、思いは如何ばかりであったことか。命終える際は、先人の智慧に頼る他はないのである。その教えに照らされて、進むべき道が白く浮かび上がっている如きである。政二翁、行年は六十六であった。

第三節 妙好人伝の歴史

このように妙好人列伝は仰誓和上以来、篤信門徒の記録が脈々と伝えられているのであるが、その妙好人伝を編んだ側の歴史を辿ってみるのも大きな意義が見出されることであろう。大和の清九郎翁に会うために伊賀上野から吉野まで出掛けた仰誓和上のように、妙好人と出会うことによって、その生き方を書物に残そうという気持ちが自ずと生じてきたものであろう。そのような同時代的重なりというのは貴重である。また同時代人でなくとも、時を経てなお語り継がれる程の篤信ぶりは、積み重なれば歴史となるほどの重みを成すのである。

藤師は『妙好人列伝』仰誓和上の章で、妙好人伝の濫觴を平安中期である長保四年、慶滋保胤著の『日本往生極楽記』に求めておられる。その続編として約百年後に大江匡房卿（長久二年生、天永二年没）著の『続本朝往生伝』が編まれた。時代的に、これら往生伝は真宗立宗以前であるから、諸宗派に及んでいた。「妙好人伝」と銘打ったのは仰誓和上が初であり、和上の二十五回忌を期して法嗣である履善師が校正を施して上下二巻として上梓したのが文政元年であった（朝枝善照師、全集第三巻による）。仰誓和上のご生誕からは百年近く、清九郎翁との対面からでも七十年が過ぎていた。

本稿で生涯を追うた妙好人十人のうちでは、道宗翁が蓮如上人と同時代と特段に古いのである。翁は上人のお側に仕えていたこともあり、『蓮如上人御一代記聞書』にその言行が伝えられている。妙好人と限定せずに、篤信の在家信者として今にまで伝わっているのは稀有なことである。以下では、仰誓和上以降を項立てしていく。

仰誓和上と玉譚和上

直林師は、仰誓和上をもって妙好人伝編纂の嚆矢とされている。和上は今から約三百年前の享保六年に京は高辻西洞院に生を受け、数え九歳で父の寂便師が住する本願寺派明覚寺に入った。剃髪時の名は祇円という。寂便師は蓮如上人九世の末裔であったという。父子共に伊賀上野に移った後に祇円師は名を仰誓と改め、『三帖和讃触象記』を著した。ご本山からは実成院という院号を賜った。和上が清九郎翁と対面したのは翁の最晩年であったが、和上は数えの三十歳という若さであった。和上は「世間ノ人ハ、吉野ノ花ヲ詠メントテ、ハル／＼至ル人ハ多ケレトモ、我々ハイカナル仏祖ノ御引合ニヤ、信者ノ花盛リヲヨメントテ、吉野ノ奥ニ下リシハ、マコトニ不可思議ノ因縁ナリ」と記しておられる。

また藤師の伝えるところによれば、仰誓和上は「予も二三の同行をうちつれ今茲寛延二年の春二月に彼地にいたり、清九郎に対面して、住家のわびしきありさまもまのあたり見侍りぬ」、「かほど目出度信者に今まで値遇せざりしは浅猿しきこと」とある。丹生谷の住まいは僅か二間ほどの藁葺き小屋を山の脇に建て、家の中は筵が二枚か三枚、道具と言えば釜一つ茶碗二つ三つしかなかったという。

藤師『妙好人列伝』には仰誓和上の章があり、その生涯や著作について詳しい。伊賀上野の後には、石見国邑智郡市木の浄泉寺が空席となって本山へ住職御差向を願い出されたので、石見に移った。和上は長子の履善師ともども浄泉寺に入寺した。履善師は深諦院慧雲和上の門下で修学に勤しみ、後に芳淑院という院号を賜った。藤師が、特に章を設けて仰誓和上を採り上げた理由は、長い引用であるが以下に明らかである。漢字は新字体に改めたが、仮名遣いは元通りにしてある。

実成院が妙好人伝を書かれたのは、僧誓鑑の序文に言ふやうに、「今より後の世の人をこの法に誘引せんため」であることは言ふまでもないが、実成院がそれらの妙好人を取り扱はれる態度は甚だ謙虚であり、深切周到であることを注意すべきである。こゝでは実成院は一大の学匠の衣を脱ぎすて、一文不知の尼入道と同座する思ひで、沁々として妙好人達を仰いでをられる。その態度は仰誓といふ名そのもののやうに謙敬である。かういふ態度というものは誰にでも出来ることではない。いはゞ仏法の深い智慧から生れ出づる態度である。仏と仏は相逢ふて合掌恭敬せられるやうに、まことの妙好人に逢ふと合掌随喜の心をもつて相接する。さういふ人を妙好人といふのである。それ故に妙好人の前に合掌拝跪する人は、また一個の妙好人といふべきである。

ここにおいて、大和の清九郎翁と同時代に生き、妙好人としての生き方を記録に留めた仰誓和上をもまた妙好人であると翼賛する考えがはっきりと示されている。純なる信心を持つ者同士は、一言二言交わしただけでお互いに通ずるものがあるであろう。篤信の人と出会い、その信心に感ずるところあって、その生き方を後世に伝えたいという思いがまた自らをその境地に高めていったものであろう。その伝で考えれば、藤師もまた妙好人の一人に列せられて然るべきであろう。妙好人伝の歴史は、今や真宗教学史においても独立した分野として扱うという視点が成り立ちそうである。

ここで、仰誓和上ご自身の筆になる教えに触れてみよう。「たのむ一念」ということについて、次のようなみ教えである。傍点は原文のままである。

たとへば敵に追ひかけられて仕方なしに、丈夫さうな人を見て助けてくだされと頼むのはやるせなさの頼みといふものぢや。また、わしも近頃彼れはれ仕合わせが悪うて困つてをると申して人に無心を言ひかけるのは歎き頼みといふものである。しかるに、今自分が悪漢につけられてをるのを知らずにゐる時、慈悲深い人がこれを憐んで、お前かやうかやうぢや程にわしが内へござれと深切に言ふて聞かすのを聞いて、助けてもらふ心になつたのが、正意のたのむ一念の味ひぢや。

又、盲人のひとり旅、海川があるとも知らず、とぼとぼと通りかゝるを、座頭さん、そこは船場ぢやほどに怪我をしてはならぬ。わしが乗せて進ぜやう、といふ船人の言葉を聞いて、疑ひなく、はからひなく、船人にまかす一念を指して、たすけたまへとたのむとも信ずるとも申すのである。

まずは前半で、頼み事一般について三分類をしている。やるせなさの頼みというのは、漠然としており捉え所がないとも言える。二つ目は歎き頼みという部類で、これは自分の不仕合わせをどうにかしてほしい、というような趣が感ぜられる。三つ目が正意の頼みというもので、これが信心に関わり、極楽往生を願うという本来の頼み事であろう。後半は、悟りを得る道を渡し船の譬喩に託しているようである。差し詰め、船頭さんが阿弥陀如来であろう。海を渡るにしても川を渡るにしても、道を歩むのとは異なる危うさがある。まして目が見えないのであるから、声で導くよりない。その声に導かれて水を渡り終えるというのは、往生の本懷を遂げるという喩えであろう。

実は、清九郎翁に会うやうに仰誓和上に勧めたのが、玉譚和上であつた。仰誓和上より一歳

年下の享保七年生まれ、今からちょうど三百年前である。元は越中茗荷原妙覚寺の住持であったが、後に大和の浄光寺に移られた。数え年二十八歳で仰誓和上に次のような手紙を書いた。

とかく信ずるというものハ愚痴ニならねバ信ぜられぬものにて候、清九郎宗衛門をよくよく御覧被成候、一向かしこたてハ無御座候、これニよりて世に上野なき信者と申事ニ而候、とかく雑行難修自力のすたらぬと申も、かしこだてしての事ニ候、

ここでの「愚痴」は字の通り、愚直で痴に徹するの意であろう。信心するからには生半可な程度ではなく、愚直なまでに貫徹せよという教えである。宗衛門については『真宗人名辞典』にも見えない。清九郎翁と同時代の同行であろうか。「かしこだて」というのも妙好人という生き方を考える上で鍵になるであろう。即ち、何事に於いても知ったかぶりをせずに知らぬ事は知らぬと言えば良し、ことに信心についてはそのような心懸けが肝腎と論しているのである。

両和上とも、若くして妙好人という生き方に問題意識を持ったのである。その意識が、清九郎翁という同時代人との邂逅によって体系化されていったのである。妙好人は、学問として信心を深めたのではない。在家の門徒として、主としてお聴聞によって教えをいただくことに日々の喜びを見出すという暮らしを営んでいた。その信心が口から迸り出た瞬間に、人を本能的に捉えるような真理を説き明かしたというところが真相であろう。

菅真義師

石州学派の流れを汲む、本願寺派光現寺に大正十一年に入寺した菅真義師は明治十二年の生まれであった。善太郎翁の住まいに近く、翁は光現寺に聴聞に通っていたのであった。翁は筆まめで手紙などもよく書いたが、筆跡が独特で判読が難しかったという。そこで真義師が資料を纏めて『分陀利華』など刊本にした。大拙居士『妙好人』の巻末に、序文や抜粋が収録されている。序文前半を引用してみよう。

妙好人伝中の人となれる者、石見にもその数十人に及ぶけれども、その中の多数はすでに隣村の人にすら忘れられんとしている有様である。然るに有福村の善太郎翁は、その名ますます遠近に及び、今に至るもその墓には参詣者は絶えることなく、香煙は縷々として常に立ち登っている。参詣せる面々は帰途必ず当光現寺を訪れ、頌徳碑を拝し、次で善太郎翁の遺物の縦覧を乞い、しかして逸話をも聞かしてくれと懇望せられるのが例である。よって里の父老の言い伝えたる逸話の数々を蒐めて、ここに一小冊子とし、『分陀利華』と名づけ、同信の人々へ頒ち、共に法味を味わんとて、刊行したるものである。

このように、ともすれば妙好人の存在が忘れられがちであると嘆き、善太郎翁の功績を永く後の世に伝えるための刊行であることを説いている。序文後半は、善太郎翁の生涯を簡単に記している。序文に続いて、善太郎翁の逸話を三十三伝えている。長短様々であるが、通読すれば翁の人となり伝わってくる。

才市翁伝に連なる系譜

前節では直林師の妙好人伝に倣い、十人の列伝とした。その中でも、才市翁は必ずと言える

ほど妙好人伝には欠かせぬ存在であって必ずその一人に数えられていた。妙好人伝の数だけ才市翁伝が遺されていると言える。それだけに、翁の生涯をどう捉えるかもまた趣が異なることであろう。年代順に追ってみたい。

最も古くは、翁の在世中に縁を得られた寺本慧達師の筆による一文に遡るであろう。師は、翁が毎朝参詣していた石見国安楽寺の住職であった梅田謙敬和上（明治二年生まれ、昭和十三年没）の甥であった。ご自身は明治二十九年生まれで、十九歳の折に叔父の寺で才市翁と出遭うたのであった。「生ける妙好人、浅原才市」という小伝は、次のような書き出しである。

浅原才市と言っても誰のことであるか、その名を聞くも初めての方々が多いでしょう。勿論解らない筈です。彼は数年前まで四十三県の中で汽車のない県に数えられていた島根県の一漁村に生れて、今貧しく下駄大工として生活している一老人に過ぎないのです。今私はこのはしたない田舎の老人を特にこの貴重なる誌上に紹介しようとするのは、別に異なった意味はないのです。ただ彼が親鸞聖人の真摯なる御同行であり、真宗の体现者であるが故です。ただしこれは私がさよう思うのみであるかも知れないのですが、私は幸に彼、浅原才市が法味愛樂の発露として、方言まじりで書き集めている、彼の「ロアイ」を皆様と一緒に、批判し翫味する事が出来ます。

「生ける妙好人」という題名にもある通り、この折は才市翁六十五歳であった。翁は八十三年という長寿を得たため、まだ晩年という境地ではなかった。しかし妙好人としての評判は広まり、遠方からも篤信の同行同朋が訪ねてくることも多かったであろう。世は既到大正年間であったが、石見国には直前まで鉄道が敷かれていなかった様子が伝えられる。明治維新以前、幕末の時代に生を受けて激動の半世紀を生き抜き、傍らで信心に篤い年月を重ねた生涯は貴重と言えよう。そして伝聞や遺された文を頼りにしての伝記ではなく、翁その人と対面して得た印象を伝えているのも貴い。楠恭師の文章「寺本慧達師を訪う」（大拙居士『妙好人』に収録）によると、才市翁のお里は石見国瀬摩郡温泉津町小浜で、寺本師のお里はここより更に十里も山中にあったので、寺本師はいつも才市翁宅に寄って話を聴いたそうである。

本文としては、才市翁の「ロアイ」を引用しているが、それは一部でしかない。一文の結びは、次のようになっている。

浅原才市、実に彼は如何に偉大なる芸術的世界を建設せるかを見よ。彼は素樸な表現をしている。しかし彼にして現代人の多くの有する表現力と、概念分析の能力とを与えられたならば、如何に偉大なる哲学を生み出すことだろう。私は最後に彼の素樸な表現に対して、読者が極めて同情ある理解を有せられんことを切に望む。

生ける妙好人浅原才市が、今後如何に（生活）を続けて行くか、今後における彼の消息を、再び本誌上において皆様に紹介することを、非常の光栄としています。

ここで結びとして総括されているように、才市翁が遺した「ロアイ」は醇朴そのもので、漢字や仮名遣いも正書法から外れた独特のものである。それがまた、外に例を見ない味わいとなっているのも確かである。ここに言われているように、現代人並みの表現力と概念分析などを加えてしまえば、この味わいは元も子もなくなり雲散霧消してしまうであろう。ここには翁の人

となりの底に、ご一新の世となって半世紀という時代性、余所の地より遅れて鉄道がやっと通ったという地域性、これらが相俟って遺された「口アイ」として結実したのではないかとも思う。

寺本師が上掲の文を発表したのは、富士川法游居士が主宰した『法爾』誌上であった。居士は慶応元年生まれ、昭和十五年没で没後に正信院法游号を追贈されている。代々が医家で、ご自身も広島県立医学校を卒業して医師となった。本業の傍らで信心も篤く、大正五年五十二歳の折に親鸞聖人の思想信仰を世に善く伝えるために正信協会を設立し、二年後に機関誌『法爾』を創刊した。晩年に入って昭和十二年七十二歳となってから妙好人伝の第一冊を刊行し、三年間で続編十四冊にまで至った。才市翁が生涯を過ごした石見国とも近く、行き来があったことであろう。藤師は法游居士の生涯を「勇猛精進」の四字に集約せられると述べておられる。居士自身の言では「人間は何のために生まれて来たかといふことは、それは如来の国より生まれて来て、如来の仕事の一部を担当し、そして如来の国に帰ると感じるところに、人生の意義がある」というようになる。如来の国、即ち極楽浄土が本来の住処であり、現世は仮の宿りである、と。全体の譬喩中でも、「如来の仕事の一部を担当」という表現が含蓄に富む。如来の仕事と言うからには、悪事には手を染めぬであろう。現実として人は生きている間に善惡諸事に手を出す、そのうち善に関わる方だけを如来の仕事と喩えたものであろう。また「仏になる仕事をするとは、自分の職務を忠実にすることである。忠実とは身体をつゞくかぎり、時間のあるかぎり行ふことである」との言もある。職務に忠実、とは宗教を離れて世俗一般としても人生訓として最も基本的な条であろう。これは「如来の仕事」を、より具体的に言い直しているとも考えられる。

次に伝わったのは、法游居士の手次寺であった安芸国徳応寺の藤秀琿和上であった。和上は明治十八年、加賀国松任に生を受ける。『新撰妙好人列伝』の序は、昭和二十一年六月という日付が入っている。この年、六十二歳であった。漢字は新字体に改め、仮名遣いは元のままで引用する。

純情に生きる人を仏教では妙好人と名づける。純情とは意識的にまた無意識的に大いなる「理」に随ふて動く純粋感情であり、宗教的の帰依と表裏をなすものである。さうしてこの帰依の感情から生れる善行美德は最も清浄であり、強靱であり、恒久性をもつてゐる。帰依なき行善は膠のない絵具をもつて彩色する如くであると、聖徳太子の教えたまふたのは真理である。

これは分量としては序文全編の六分の一程である。本稿全体の論旨からしても、序文の冒頭で妙好人とは、という定義をしているのは注目に値する。「仏教において純情に生きる人」というように、極めて簡単な定義である。本文では西行法師に始まり、富士川法游居士に至るまで六十五人の妙好人伝を採録している。在家の信者に限定せず、貝原益軒師や加賀の千代尼、一茶和上や良寛和尚と高名の人も多い。真宗に限らず、在家と出家を問わず、広く篤信の人を蒐めて伝記を記すことによって「信心とは何か」を問いかねようとしたのであろう。その才市翁伝には、生前の翁を訪ねていった由は伝えられていない。

続いて妙好人に心引かれたのは、大拙居士であった。居士号は、鎌倉円覚寺の釈宗演管長から受けたものである。大拙居士には、その名も『妙好人』という一冊があり、昭和二十三年に刊行された。この一書には、栃平ふじ姫、香林保一翁や小川仲造夫妻への言及もあるが、ごく断片的である。一書の大半は才市翁の「口アイ」を引用している。これは、大拙居士が才市翁

の話伝え聞いて、如何に心動かされたかということを如実に示す事実であろう。大拙居士は明治三年の生まれである。戦中から戦後にかけて、浄土仏教と妙好人についての著作を何冊も刊行した。居士はまた禅宗についても通底し、浄土教との共通点を大乘思想に求めようとした。敗戦直前の刊行となった『日本的靈性』では、そのように広い視点から禅と浄土教を論じ、特に真宗の教義を体現する妙好人に着目している点は特筆すべきである。『妙好人』冒頭の一文は、居士の考え方をそのまま筆にしたという趣がある。

浄土宗信者の中に「妙好人」の名で知られている一類の人達がある。ことに真宗信者の中にそれがある。妙好というは、もと蓮華の美しさを歎称しての言葉であるが、それを人^{フンダリーカ}居して、その信仰の美しさに喩えたのである。佛教では、インド伝来の故に、分陀利華^{サツタラマフンダリーカ}がその文学によく引用せられ、色々の意味に使われる。『妙法蓮華經』などは誰の口にも膾炙せられている。

妙好人と言われる人達の最も大なる特徴の一は、彼らの比較的文字に乏しいことである。法然上人は、信仰は「一文字不知の尼入道」にならぬと得られないというようなことを強調する。それから「白木の念佛」ということもある。何でも心に蟠りがあると、信仰の入る余地がないのである。(後略)

まずは、妙好人の淵源を分陀利華に求めている。これは原点回帰とも言えるであろう。白木とは彩色をしていない木地のままの木材のことで、これを阿弥陀如来の本願にもとづいて純粹に称える念仏に譬え、彩色は無駄にこれに付け加えられてゆく自力根性に譬えている(『浄土宗大辞典』)。「一文字不知の尼入道」とは、生半可な文字知識があつては却って信心の妨げになる、妙好人のように自分の考えから安心に至れ、という教えと捉えられようか。やはり自力門と違う、絶対他力にお縋りせよ、との意である。

そして大拙居士その人について一書として上梓されたのが、菊藤明道師である。書中からどこを引いても興味深い、「はじめに」と題された章から引用する。四弘誓願からの括弧付き引用後に口語訳があるが、それは略す。

大拙の思想・学問には深い知的・科学的思索が見られるが、その底には自らの宗教的体験による靈性の覚醒があった。大拙は、ときに逡巡し苦悩しつつ自己の思想を練り上げ、言語化し、それを世に発信し続けたのである。そこには宗教学者・仏教学者であると同時に、一人の人間としての姿と、すべての衆生を済度して止まない利他大悲の菩薩のお姿がうかがえる。「衆生無辺誓願度」に邁進する生々たるいのちの尽きせぬ脈動が感じられるのである。

妙好人について語るということは、信心の有り様を巡って自ずと主観的になるものと思う。それというのも、妙好人一人一人が信心の持ちようが異なり、それを捉える側もまた同じである。門徒がお説法を聴聞し、その教えを咀嚼し、自らの言葉として語るという経緯を辿れば、語られた教義が活き活きと再生産されるのである。大拙居士においては、そのような信心が核にあって、学術的探索が加えられるのである。妙好人を日本的靈性の具現と考えるのが、その一例である。菊藤師の著書には、大拙居士と共に柳宗悦氏と楠恭師について述べた節が立てられている。二人とも、やはり専ら才市翁の伝記を主として妙好人伝を編んでいる。

さて本筋を才市翁研究に戻すと、やはり石州学派に所縁があることを再認識するのである。朝枝善照和上は昭和十九年のお生まれで、石州浄泉寺の血脈に連なる。著作集が全五巻に編まれているが、そのうち第二巻と第三巻が妙好人基礎研究として組まれている。以下に、この二巻目次を採録してみる。

序論 『妙好人伝』 研究史

第一章 初篇『妙好人伝』の特色

第二章 『妙好人伝』の成立過程

第三章 編者仰誓の『自警』

第四章 石州学派と『妙好人伝』

第五章 石州学派と『高城家儀』

第六章 『親聞妙好人伝』と『妙好人伝』の関係

第七章 履善師とその周辺

第八章 石州学派と伝道

第九章 『遊方日記』にみられる石州浄泉寺の動向

結語

こうして全体の目次に目を通してみると、和上がどのように妙好人論を体系化されていったかを辿ることが出来る。本文には才市翁という見出しはないが、附録には才市翁から伝えられた帳面の書き付けを活字化して翻刻している。和上に至って、真宗の妙好人研究は一つの頂点に達したとも言えようか。仰誓和上に始まって、三百年近く弛みなく妙好人という生き方を追いつけてきたのである。しかもそれは孤立した巨峰ではなく、周囲には数えきれぬほどの峰々が連なっている。

そして、善照和上の法統を嗣がれたのが直林師である。数ある妙好人伝で、『日暮の中にはとばしる真実』という副題が付いた著書は、入門的位置付けとして最適であった。最大の特徴としては、幅広い真宗史の視点から妙好人の実践が教義とどのように関わってきたかを明らかにした点であると筆者は考えている。そして一人一人の生き方が親しみやすく伝えられている。その筆致によって、妙好人は如何にも身近に居る人として感ぜられるのである。それは即ち、門徒であれば誰もが妙好人たり得る存在であるということを語っているように思われる。これこそが、真宗における信心の在り方として柱となる心得であると言えるのではないだろうか。

第四節 結び

本稿で振り返った妙好人十人、まさに十人十様であった。この十人を大雑把に二通りに分けるとすれば、自ら信心の中身を文字にして遺した同行と、読み書きができないために言行録は周囲の人などが見聞きしたことを後世に伝えている場合とに大別することができよう。妙好人自らが筆を執って書き残した文には、何とも言えぬ味わいがある。他方で、言行録として伝わる振る舞いには、ともすれば常識を突き抜けた想像外の言動もある。それも道理で、常識人が常識の範囲内で発した言葉や振る舞いをありのままに記録したとしても、一般的な興味を特段惹くようにはなるまい。一般常識の意表を衝くような記録として伝えられてきたものが妙好人

伝である、という側面もあろう。

また第三節では妙好人伝を編んだ和上の足跡を追うたが、これも妙好人研究には欠かせぬ視点という意図で立論したものである。清九郎翁には仰誓和上、才市翁には慧達師と、妙好人を見出して「世に出した」後ろ楯があったのである。今では、説法を聴聞して妙好人が育ち、それがまた説法の譬喩因縁に取り込まれる、という循環ができていないのではないだろうか。妙好人の言行録には、説法で聴聞した中身や文言が残っていたという例も近江の興市翁と真了師の間で見られた通りである。

妙好人が生き抜いた時代を図示して明らかになったように、本稿で採り上げた十人のうち八人は幕末と明治維新という動乱の時代を生きた。斎藤政二翁は大正年間のお生まれで、太平洋戦争の戦火をくぐり抜けた。戦後の平和憲法によって、八十年近くも戦の禍を免れている現代からすると、想像も出来ないような時代を生き抜いてこられたのである。明治になってからの廃仏毀釈は、仏教界が一体となって大いなる逆風に堪えたことであろう。「このまま突き進めば、軍国日本は破滅する」という自明の理を、戦前戦中の宗教界は持ち得なかったのであろうか。「世の中、安穏なれ」というのは浄土真宗立宗の根本であった筈である。このような乱世で、妙好人が何を考えて信心に打ち込んでいたのか、ここまででは明らかになっていない。これについては、これから考えてみたいところである。そういう観点で眺めてみると、これからの妙好人がどう生きるか、というような辺りも見えてくるように思われる。例えば、現代日本が享受している太平の世を、戦乱が続く世界中に広められないものか。上方^{おうご}噺に『胴乱の幸助』というネタがある。「人の頭にまだ丁髷を載せてた時分に、丹波の山奥から枋の先に天保銭三枚ぶら下げて出てきて、真っ黒になって働いた。それで今では丁稚の二三人も使う割り木屋のおやっさんや。*1このおやっさん、何の道楽もないのやが、たった一つの楽しみが喧嘩の仲裁や。道の真ん中で喧嘩してる二人の間に割り込んで、「待った、この喧嘩、わしに任すか」「あんた、割り木屋のおやっさんでんな、へい、任します」と言うたら大おさまりや」というような荒唐無稽な筋立てで、本筋では芝居『桂川連理柵』『帯屋の段』の話を真に受けて、京は柳馬場押小路にあった帯屋の店に押し掛けるといふ運びになっている。ここで一つの問いを立ててみる。「割り木屋のおやっさんは妙好人たり得るか」という問いである。ここでの答えは「可」である。即ち、幸助はんが信心深い門徒であったとするならば、喧嘩の仲裁を道楽としていることは、むしろ賞賛されるべき行いである。それは利他の行いであり、仏の意に適うであろう。妙好人の妙好人たる所以は、実利を求めぬという一点にあるとも言える。とは言うものの、実生活に基盤がないことには暮らしは立ち行かない。その兼ね合いが難しいのであろう。

注

- * 1 枋とは天秤棒、天保銭一枚は百文、現在の価値では数千円である。割り木とは煮炊きに用いる薪である。薪は煮炊き用に必需品であったので、どこの町内でも身近な場所に必要であった。

参考文献

- 朝枝善照 (2016) 『妙好人伝基礎研究 正統編』 京都：永田文昌堂。
安藤礼二 (2018) 『大拙』 東京：講談社。
安藤礼二 (2019) 『列島祝祭論』 東京：作品社。

- 石井公成（2017）『〈ものまね〉の歴史 仏教・笑い・芸能』東京：吉川弘文館。
- 伊藤智誠（2018）『妙好人めぐりの旅』京都：法蔵館。
- 角岡賢一（2020）「信仰と芸能という側面から見た説教」『節談説教』、節談説教研究会。
- 菊藤明道（2017）『鈴木大拙の妙好人研究』京都：法蔵館。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 白川晴顕（2015）『妙好人のことは――信心とその利益――』京都：本願寺出版社。
- 鈴木大拙（1976）『妙好人』京都：法蔵館。
- 鈴木大拙（2010）『日本的靈性 完全版』東京：角川ソフィア文庫。
- 関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
- 関山和夫（1991）『落語風俗帳』東京：白水社。
- 関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
- 関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。
- 谷口幸璽（2004）『「節談」はよみがえる』京都：白馬社。
- 直林不退（2010）「説教の歴史と節談」『節談説教』第五号。
- 直林不退（2014）『名人木村徹量の承継者 神田唯憲の節談』八王子：節談説教研究会。
- 直林不退（2019）『妙好人 日暮しの中にはとぼしる真実』東京：倭成出版社。
- 西山郷史（2018）『妙好人 千代尼』京都：法蔵館。
- 府越義博（2010）「説教台本作成法」『節談説教』第六号、37～49頁。
- 藤秀璿（2013）『新撰 妙好人列伝』京都：法蔵館。